

# 元総社中学校遺跡

元総社中学校体育館改築建築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 6 . 9

前橋市教育委員会

# 元総社中学校遺跡

元総社中学校体育館改築建築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



「方光」銘押印瓦の拓影集成とオーバーラップイメージ

2 0 1 6 . 9

前橋市教育委員会

【屏繪解說】

- 上段拓影 ( $S = 1 \diagup 2$ ) : 本道跡 H - 4 - 13  
中 灰 圖 ( $S = 1 \diagup 1$ ) : 繪圖・本道跡 H - 4 - 13 (凸面右側線下端)  
網掛・山王庵寺塔跡西 (20 A 135 - 24 T・整理番号 24 - 17)
- 下段拓影 ( $S = 1 \diagup 2$ ) 左から :
- 山王庵寺金堂 (6 次調査掉図 17 - 2)
  - 山王庵寺金堂 (6 次調査掉図 17 - 5)
  - 山王庵寺塔跡西 (20 A 135 - 24 T・整理番号 24 - 17)
  - 山王庵寺金堂 (6 次調査掉図 17 - 4)
  - 山王庵寺金堂 (6 次調査掉図 17 - 3)
  - 山王庵寺金堂 (19 A 135 - 12 T)
  - 元絶社明神道跡図 (登録番号ゼ 68)



元總社中学校遭難全貌（北東から）



「方光」銘文字瓦（H-4-13）出土状況（南東から）



H-2（新）カマド土層断面（北東から）



H-4-9（須恵器鉢）と大谷3号窯の断面比較



出土した緑釉・灰釉陶器



基本層序（西から）

## はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ山王古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社中学校遺跡は、上野国府推定区域や上野国分僧寺・国分尼寺などの施設を擁する古代上野国の中核地域であり、多くの注目が集まっております。今回の調査では、古墳時代から中世にかけての集落跡が見つかりました。出土遺物は奈良時代から平安時代のものが充実し、特に「方光」文字瓦は山王廃寺に関連する遺物で出土例は非常に少ないものです。今回の調査成果をはじめとしてこれまでの調査成果の蓄積は、国府や国府のまちの姿を再現するための資料と考えております。残念ながら、現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、記録的な猛暑そして寒風の中、発掘調査担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成28年9月

前橋市教育委員会  
教育長 佐藤博之

## 例　　言

- 1 本報告書は元総社中学校体育館改築建築工事に伴う元総社中学校遺跡の埋蔵文化財発掘報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

|  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 遺跡名  | 元総社中学校遺跡                         |
| 調査場所   | 前橋市総社町総社 3148 ほか                 |
| 遺跡コード  | 27 A 207                         |
| 発掘・整理担当者   | 中村岳彦（技研コンサル株式会社）                 |
| 発掘調査期間   | 平成 28 年 2 月 8 日～平成 28 年 2 月 29 日 |
| 整理・報告書作成期間                                       | 平成 28 年 3 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日 |
| 3 本書の原稿執筆は 1 を小峰 篤（前橋市教育委員会）、他を中村が担当した。          |                                  |
| 4 発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。                       |                                  |
| 飯島冬子 大川明子 太田英明 加藤知恵子 神坂慶三 北爪二郎 今野妙子 佐藤和彦 佐藤文江    |                                  |
| 田島君代 土屋和美 中野光雄 畠山勝利 福島禄子 星野博 松本徳雄 丸山和浩 丸山文江 吉澤克夫 |                                  |
| 5 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。      |                                  |
| 6 下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。           |                                  |
| 浅間陽 池田敏宏 出浦崇 小此木真理 坂口一 高井佳弘 津野仁 永井智教 野田満 日沖剛史    |                                  |
| 山下敬信 山下工業株式会社                                    |                                  |

## 凡　　例

- 1 掘図中に使用した北は座標北である。
- 2 掘図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、住居跡：H、掘立柱建物跡：B、溝跡：W、井戸：I、土坑：D、ピット：P である。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各国スケールを参照されたい。

|                                |                   |           |            |         |
|--------------------------------|-------------------|-----------|------------|---------|
| 遺構 住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸・土坑・ピット・その他 | ··· 1/60 全体図      | ··· 1/100 |            |         |
| 遺物 土器・石製品                      | ··· 1/3, 1/4, 1/6 | 鉄製品・石製品   | ··· 1/2 玉類 | ··· 1/1 |
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値、〔 〕は復元値を表す。
- 6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。

|               |     |            |     |        |     |        |     |        |     |        |     |        |     |
|---------------|-----|------------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|
| 遺構 燃土範囲       | ■■■ | 灰土範囲       | ■■■ | 粘土範囲   | ■■■ | 硬化面範囲  | ■■■ | 地山     | ▨▨▨ |        |     |        |     |
| 遺物 須恵器（還元焰）断面 | ■■■ | 須恵器（酸化焰）断面 | ■■■ | 灰釉陶器断面 | ■■■ | 灰釉施釉範囲 | ■■■ | 綠釉施釉範囲 | ■■■ | 黒色処理範囲 | ■■■ | 油煙付着範囲 | ■■■ |
| 煤付着範囲         | ■■■ | 研磨範囲       | ■■■ |        |     |        |     |        |     |        |     |        |     |
- 7 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

|  |
|--|
| As-A (浅間 A 輪石: 1783)、As-B (浅間 B 輪石: 1108)、Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ: 6世紀中葉)、Hr-FA (榛名二ッ岳洪川テフラ: 6世紀初頭)、As-C (浅間 C 輪石: 3世紀後葉~4世紀前半) |
|--|

# 目 次

卷頭図版 1・2

はじめに

例言・凡例・目次

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| I   | 調査に至る経緯    | 1  |
| II  | 遺跡の位置と環境   | 1  |
| III | 調査の方針と経過   |    |
| 1   | 調査範囲と基本方針  | 7  |
| 2   | 調査経過       | 7  |
| IV  | 基本層序       | 9  |
| V   | 遺構と遺物      |    |
| (1) | 堅穴住居跡      | 9  |
| (2) | 掘立柱建物跡     | 13 |
| (3) | 溝跡         | 13 |
| (4) | 井戸、土坑、ピット  | 14 |
| (5) | 遺構外出土遺物    | 14 |
| VI  | 発掘調査の成果と課題 | 30 |

## 挿図目次

|        |                   |    |        |                             |    |
|--------|-------------------|----|--------|-----------------------------|----|
| Fig 1  | 遺跡の位置             | 1  | Fig 13 | H-8号住居跡、H-9号住居跡①            | 21 |
| Fig 2  | 周辺道路図             | 3  | Fig 14 | H-9号住居跡②、B-1号掘立柱建物跡、W-1号溝跡、 |    |
| Fig 3  | 周辺調査地点とグリッド設定図    | 6  |        | I-1号井戸                      | 22 |
| Fig 4  | 全体図               | 8  | Fig 15 | W-2号溝跡、D-1~5号土坑、P-1号ピット     | 23 |
| Fig 5  | 基本層序              | 9  | Fig 16 | H-1~3号住居跡出土遺物               | 24 |
| Fig 6  | 時期別遺構分布（5~11世紀）   | 14 | Fig 17 | H-4号住居跡出土遺物                 | 25 |
| Fig 7  | H-1号住居跡、H-2号住居跡①  | 15 | Fig 18 | H-4~9号住居跡、W-1~2号溝跡出土遺物      | 26 |
| Fig 8  | H-2号住居跡②、H-3号住居跡① | 16 | Fig 19 | W-2号溝跡、D-1~3号土坑、P-1号ピット、    |    |
| Fig 9  | H-3号住居跡②、H-4号住居跡① | 17 |        | 遺構外出土遺物                     | 27 |
| Fig 10 | H-4号住居跡②          | 18 | Fig 20 | 上野国府城の綠釉陶器出土状況              | 31 |
| Fig 11 | H-5~7号住居跡         | 19 | Fig 21 | 周辺道路出土の竈形土製品と有頭形態の竈形土製品     | 32 |
| Fig 12 | H-6~10号住居跡        | 20 | Fig 22 | H-4~9と様似産小型鉢の比較             | 32 |

## 表目次

|       |              |    |
|-------|--------------|----|
| Tab.1 | 周辺道路一覧表      | 4  |
| Tab.2 | 井戸、土坑、ピット計測表 | 14 |
| Tab.3 | 出土遺物観察表      | 27 |
| Tab.4 | 周辺の綠釉陶器出土遺跡  | 31 |

## 写真図版目次

|      |   |  |
|------|---|--|
| PL.1 | 調査区全景（北から） 調査区北半部全景（北西から） 調査区南半部全景（北西から） H-1全景（南東から） H-2（新）全景（東から）  |  |
| PL.2 | H-2（新）カマド全景（北東から） H-2（新）掘り方・H-2（古）全景（西から） H-2（古）カマド全景（西から） H-2~1綠釉陶器碗出土状況（北から） H-3全景（北東から） H-4全景（西から） H-4カマド遺物出土状況（西から） H-4カマド天井石崩落状況（南西から） |  |
| PL.3 | H-4~6須恵器小皿出土状況（南西から） H-4カマド全景（西から） H-4~12・13カマド構築材出土状況（西から） H-4~17石臼出土状況（南から） H-5全景（西から） H-5カマド全景（西から） H-5~4須恵器小皿出土状況（北西から） H-6全景（北西から）     |  |

- PL.4 H-6~2土師器壺出土状況(南から) H-7カマド全景(南から) H-8全景(南東から) H-8カマド全景(南西から) H-8カマドSPB北側補土層断面(南西から) H-8貯藏穴全景(南西から) H-8掘り方全景(北東から) H-9カマド全景(西北から)

PL.5 H-10全景(北西から) B-1全景(東から) W-1全景(東から) W-2遺物出土状況(北から) W-2全景(北から) I-1全景(東から) D-1~3灰陶器皿出土状況(北から)

PL.6 D-2全景(北から) D-4全景(東から) D-5SPB土層断面(北西から) D-5全景(北西から) P-1全景(西から) 谜~区層遺構認定状況(南から) 調査風景(北東から)

PL.7 遺物写真(H-1~4)

PL.8 遺物写真(H-4~9, W-1~2)

PL.9 遺物写真(D-1~3, P-1、遺構外) 道路説明会の様子(北から)

参考文献



\*主要な文献以外は削除した

## I 調査に至る経緯

前橋市立元総社中学校の体育館改築工事にあたり、前橋市長 山本 龍（教育施設課）と前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、既存建物の解体後に試掘調査を実施することで合意に至った。平成27年9月25日付けで試掘調査依頼が提出された。これを受け既存建物解体後の平成27年12月24日～25日に試掘調査を実施した。調査の結果、既存建物の工事影響を受けていない箇所で住居跡等を検出した。遺構の検出深度、体育館改築工事に伴う掘削計画などを考慮すると遺構の保存が困難なものと判断し、記録保存に向けた発掘調査実施について協議をおこなった。

平成28年1月12日付けで、前橋市長 山本 龍（教育施設課）より埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が市教委に提出された。市教委では既に発掘調査を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。

平成28年2月1日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社中学校遺跡」（遺跡コード：27A207）については、学校名を採用した。



## II 遺跡の位置と環境

**遺跡の位置** (Fig. 1・2) その名に国府関連地名を冠する元総社中学校は、前橋市の南西部に位置する。利根川を越えて約25km東には群馬県庁が、南約2.5kmには本市の玄関口である前橋インターチェンジが所在する。遺跡地は中学校が当地へ移転した1977年以前、五千石堰用水を基幹水路とする田園地帯だったが、1970年代に市内中小企業の近代化を目指して前橋問屋町地が造成されると、当地の周辺にも市街化が及んだ。さらに近年では、前橋～安中～富岡を結ぶ西毛広域幹線道路を中軸とする、元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって、市街地はさらに拡大しつつあり、遺跡地の周辺は今日、新旧の景観が混濁した過渡的な様相の中にいる。

遺跡地は、榛名山南東麓に伸びる相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあり、牛池川の浸食作用によって形成された低地平野と台地との崖線近くに立地する。約2万年前、浅間山は山体崩落を起こし、前橋泥流が生じた。十数メートルも堆積した泥流層は前橋台地の母体となり、その表層には川が流れた。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の總社や元総社の辺りを流れていたと考えられている。約1.8～1.3万年前、榛名山の山体崩落によって陣場岩屑などが発生し、その堆積物が相馬ヶ原扇状地の母体となった。約1.1万年前、遺跡地の周辺は、元利根川の作用によって後背湿地化が進んでいたらしく、井戸跡などの深部には前橋泥炭層が観察できる。元利根川が残した低地はその後、相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの流れに影響を与えた。これらの中小河川は榛名山の裾野を南東へ流れるが、低地の影響を受け、ちょうど遺跡地の辺りで流れを大

きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層が堆積した結果、遺跡地の周辺には約2.5 mの深さにも及ぶ総社砂層が形成された。総社砂層の堆積と中小河川の開拓作用の反復は、わずかな高台と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ち着いて、今日に至るまで下刻を続いている。台地の上部には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な地形改変の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと推測できる。

**歴史的環境 (Fig. 2・3、Tab. 1)** 紙数の都合上、国府周辺地域を見据えた広域的な叙述は既存の報告書にたのみ、ここでは、本遺跡の様相に合わせて地域を限定し、記載する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。遺構の覆土には黒ボク土が混ざることから、台地上に黒ボク土が形成されたのは、この直前と考えられる。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・13・40・41※以下「蒼海」）・小見V～VII遺跡などで確認され、現状では、染谷川左岸の自然堤防に沿って帶状に分布するが、遺物は多くの遺跡で出土し、本地点でも土器片がわずかに出土した。続く中期の住居跡は、蒼海（3・40）・小見内Ⅲ遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東麓の最末端にあたり、緩やかな南斜面で、広い微高地を面的に確保できる地帯である。後期～晩期の住居跡は少ないが、蒼海（10・100・101）・小見V遺跡などに確認される。中期からの微高地上に加え、台地内の谷地に立地する蒼海（101）でも、この時期の遺構が分布するほか、小見V遺跡は染谷川、蒼海（10・100）は牛池川の低地に立地する。牛池川の低地に面した本遺跡では、わずかながら晩期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内Ⅲ遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。牛池川の低地平野を北に望む立地だが、低地内の元総社北川遺跡や元総社牛池川遺跡では、遺物は出土するものの、水田跡などの生産域は確認されていない。

古墳時代前期の遺構は、ひとつには蒼海（38・39・17街区）・小見内Ⅲ遺跡のように、弥生時代後期の分布を踏襲する。また、蒼海（40・48）・小見V遺跡など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも住居跡が分布する。牛池川左岸の一帯では集落域のほか、低地平野に立地する閑泉明神北IV・V遺跡で水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓と推定される溝跡が確認されており、該期における集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺跡が分布し、本遺跡や蒼海（35・81・91）・甲種荷大道西II遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・閑泉明神北IV・V遺跡など、低地内の遺跡ではことごとく、Hr-FA洪水層に覆われた小区画水田跡が確認されており、この頃までには、牛池川低地平野の広い範囲が生産域として開拓されていたと推測できる。後期になると遺跡は爆発的に増え、周辺遺跡のほぼ全域で住居跡が確認される。しかしながら該期の古墳は確認されておらず、蒼海（10・23・28）などで埴輪片が出土した程度である。やや離れて約1 km東に稲荷山古墳〔42〕が位置し、直径約30 m程度の円墳で、6世紀後半頃の築造と考えられている。7世紀になると、約2 km北に、総社古墳群を代表する愛宕山古墳〔口〕・宝塔山古墳〔ハ〕・蛇穴山古墳〔ニ〕の大型方墳や山王庵寺〔ホ〕が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡の周辺では、蒼海（9・10・35）で、建物の方向が一定の規則性を示す、大規模な掘立柱建物跡群が確認されている。7世紀の住居跡は、周辺に広く分布するが、前段階に比べると減少し、現状では数軒単位の小規模な群構成が直立するよう見える。山王庵寺の約1 km南に立地する本遺跡では、山王庵寺の寺号である「放光寺」に由来する「方光」銘の押印瓦が出土した。

奈良時代、本遺跡の南は牛池川を挟んで推定上野国府城にあたり、国府の位置にはA～Dの4案が推定されている。その内、宮鏡神社南面の国府C案では、蒼海（99）・上野国府等範囲確認調査28・33・34トレンチで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この域内では8世紀後半から9世紀末葉まで、現状で住居跡は確認されていない。国府城の特殊性は周辺遺跡の出土遺物にも反映され、内面に放射状暗文を施す土器器暗文坏や、須恵器盤・高盤の出土率は他の地域に

比べて高く、蒼海（22・40・41）・小見VI遺跡など30地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）では三彩陶器、蒼海（1・38・40）では腰帶具、蒼海遺跡群（26・60）では円面硯なども該期の遺構から出土している。推定国府域の北側隣接地にあたる本遺跡では数軒の住居跡を調査した。

平安時代になると、前代にも増して各遺跡に中小規模の住居跡が数多く確認される。国庁や曹司によって構成される国衙、国司館や市・津、それらの機能を支えた宿丁が一時滞留する宿所の集落など、上野国府域の空間構成の検討は、歴史地理学的な手法によるところが大きかったが、近年では発掘調査の進展によって、城内における地点ごとの考古学的な差異が、おぼろげながら把握されつつある。例えば、国府域の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41）、小見II遺跡などには、住居跡が高い密度で分布する。この地点は、腰帶具・円面硯の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書き土器が出土している。また、国府域の西端にあたる染谷川左岸の自然堤防上は、綠釉陶器の出土が多い国府域の中でも、特に高い出土率を示す一帯で、蒼海（8・13）では合計49点もの破片が出土している。なお、国府域の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでも、特に多くの住居跡が確認され、馬具・小札・刀装具・鐵鎚など武器・武具の出土が目立つ。牛池川を挟みその対岸に立地する本遺跡では、住居跡や総柱式の掘立柱建物跡、綠釉陶器・灰釉陶器・竈形・鉄鉢形土器・三足土器などの特徴ある遺物群が出土した。平安時代中期、国府域は平将門の乱の舞台となった。将門は天慶2年（939年）に国衙を攻略するが、これに関わる考古資料は、現在のところ確認されていない。

国府域の空間構成復元を困難としている要因の一つとして、蒼海城〔i〕の大規模な地形改変がある。国庁推定域内に位置する、蒼海（23・29・65）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海城に関連する遺物としては、蒼海（23・25）で、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺・持腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。

慶長6年（1601年）、秋元長朝が総社領主になると蒼海城は廃城となり、総社城〔ii〕が築城された。長朝は戦乱で荒廃した総社領を復興するために灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水〔a〕を開削した。天狗岩用水を基幹とする水路網の整備によって領内の新田開発は進み、6,000石程度だった石高は、開削が成った慶長9年（1604年）頃、10,000石に達したと言われる。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水〔b〕や小笠原堰用水〔c〕によって補われるが、これらの用水路は一

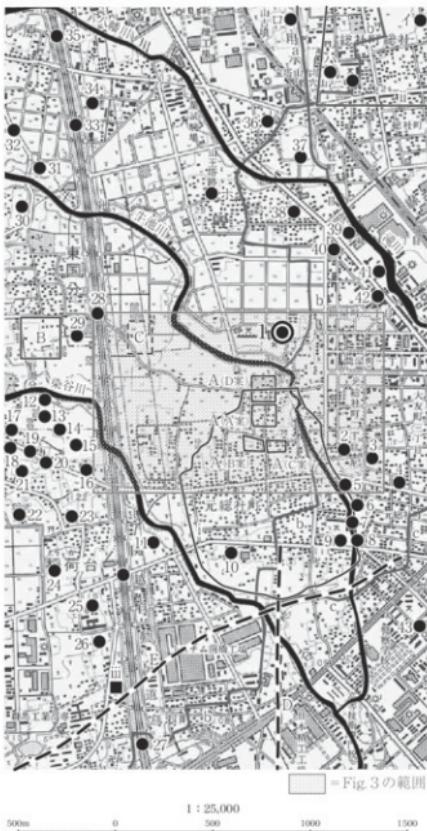
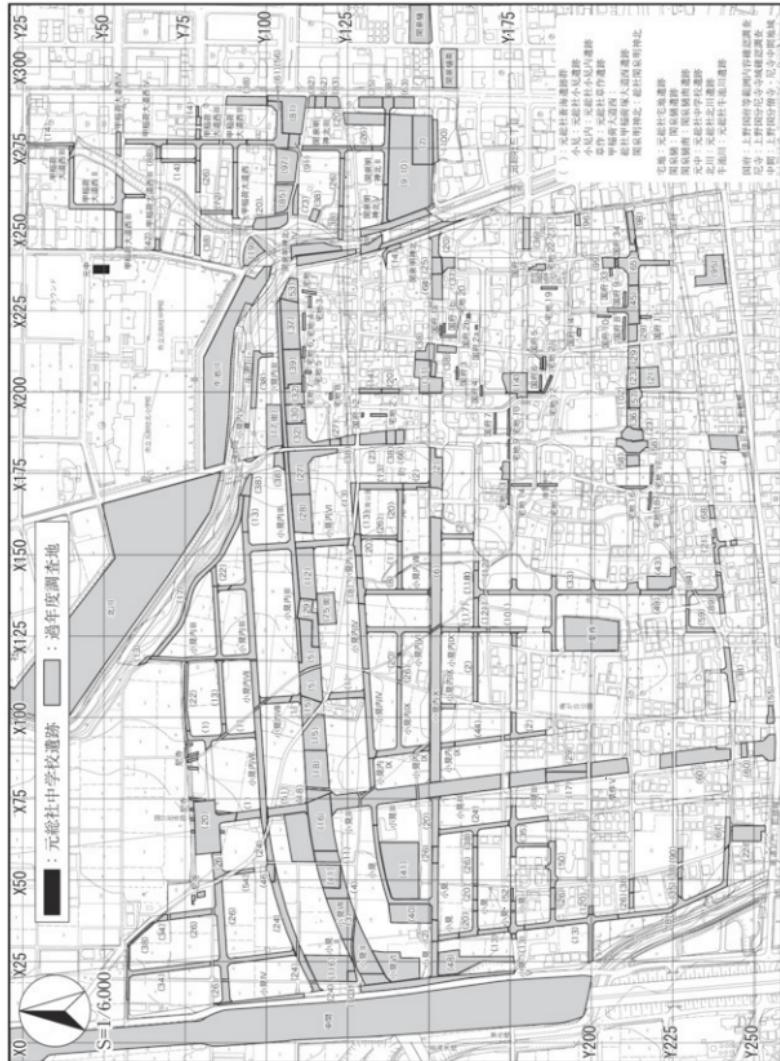


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表



方で、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする午王頭川や八幡川の中小河川から取水し、天狗岩用水とは異なる灌漑体系をもつ。その開削の時期は天狗岩用水を巡る可能性が指摘されており、つい最近暗渠化してしまったが、五千石堰用水の左岸にあたる甲種荷塹大道西跡のA区では、五千石堰用水と同一方向に流下する、11世紀以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。



### III 調査の方針と経過

#### 1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、元総社中学校の体育館改築予定地であり、調査面積は130 m<sup>2</sup>である。グリッド座標についていは国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

| 測点         | 日本測地系（第IX系）                       | 世界測地系（第IX系）                         |
|------------|-----------------------------------|-------------------------------------|
| X 235、Y 50 | X = 43800.000 m、Y = - 71260.000 m | X = 44154.8975 m、Y = - 71551.7602 m |

発掘調査は、遺構確認面まで重機（0.45 m級バックホウ）を用いて表土の除去を行い、試掘調査の所見に基づき、基本層序IV～VI層を遺構確認面とした。調査区は、試掘調査で確認された遺構の範囲を、市教委立ち会いのもとに拡張しつつ、任意に定めた。当初は遺構の空白地帯を見出し、その境を調査区の区切りとする予定だったが、住居跡は途切れることなく重複を繰り返していた。そのため最終的には、日暮れまでに重機の掘削能力が及んだ範囲を調査区とすることになり、調査範囲は変則的な形となった。遺構確認面は、ジョレンを用いて全面的な精査を行い、平面的な土質の観察によって遺構を判断した。遺構の重複が激しく、判断ができない範囲は、調査に先行してサブトレーナーを下層まで穿ち、その底面と土層断面の観察によって、遺構を判断した。確認した遺構は、土層の堆積を記録するために、土層断面を残しつつ覆土を除去した。遺構に伴うと判断できた遺物については、出土位置を記録した上で取り上げた。確認面と遺構覆土の土色は良く似ており、掘立柱建物跡の柱穴など、小規模な遺構は確認が及んでいない恐れがあったため、遺構の調査後、再び重機（0.45 m級バックホウ）を用い、W-1より南側を基本層序Ⅳ～Ⅵ層まで掘り下げて最終的な確認を行ったが、新たな遺構は確認できなかった。

個々の遺構の図面記録は、基本的に遺構の断面図・完掘時の平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用いて行い、断面図の一部はオルソーカットに変換して編集を行なった。写真記録についても、遺構の土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対して、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・SIGMA DC18-200mm）を用いて、基本的には絞り値f 8～11・広角端での撮影を行った。

報告書の作成に際しては、DTPの手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、手測りでの原図作成後デジタルトレースを行った。遺物写真的撮影にはデジタルカメラ（CanonEOS 5D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれらの調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

#### 2 調査経過

発掘調査は、平成28年2月8日から着手した。同日中に拡張できるかぎり、重機による表土除去を行い、並行して遺構の確認を進めた。10日から個々の遺構調査を開始。15日、春一番が吹き、以後は強風が続いた。想定よりも遺構が多いため作業員を増員。18日、「方光」銘瓦を発見。25日にはほぼ全ての調査を終え、翌26日に調査区の全景写真撮影を行った。同日、元総社中学校の生徒を対象に遺跡説明会を行い、50名以上の生徒が来訪した。市教委による終了確認も同日になされ、29日に現地の調査を終了した。

整理作業は、平成28年3月1日から着手した。4月8日に遺物の洗浄、15日に注記を終えた。26日に遺構図面の編集作業を終えた。28日に出土遺物の分類と報告対象の抽出を終え、観察と実測を始めた。5月31日に遺構図面の版下が完成。原稿の執筆と組版は23日から随時行った。6月17日に遺物図面の版下が完成。22日に出土遺物の写真撮影と掲載写真的抽出を終え、28日に写真図版の版下が完成した。9月9日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、18日に入稿した。19～29日にかけて遺物台帳等調査資料の整理を行い、30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

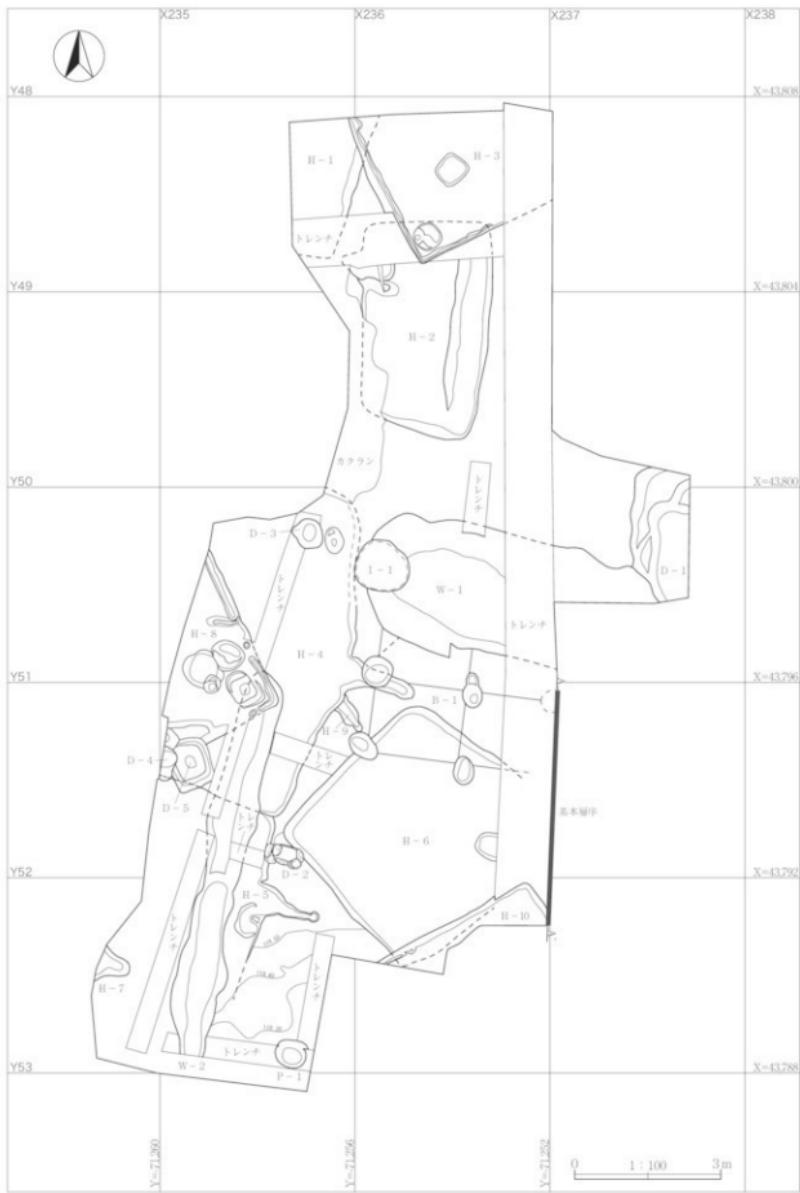


Fig.4 全体図

## IV 基本層序

元総社中学校建設以前の遺跡地は、南に面する牛池川へ下る傾斜地に営まれた水田地帯だったようで、校地造成に伴う造成土のI層は、現況の地表面から約1.2mの深さにおよぶ。II層は校地造成以前の水田床土で、その直下には滲水による鉄分溶脱層であるIII層が薄く観察できる。III層の直下には周辺遺跡に広く堆積するAs-B混土層が観察できず、直接にAs-C混土層であるV層となることから、水田の開墾に伴い旧地形は相応に削平されたと推測できる。IV層は純層に近いAs-Bで、埋没過程で窪地化したH-1覆土の最上層にのみ観察できる。なお、II層はIV層の上層に観察できることから、水田の開墾は中世以降と推測できる。VI層は広域の層序には確認できないAs-Cを含む砂質土で、牛池川の氾濫に伴う堆積砂の可能性が想定できる。以上の点から、遺構確認面はIV-VI層と判断した。VII層は暗灰色の粘質土で、VI層以前の谷地形の埋没土である。IX層は総社砂層で、I-1壁面では2m以上の堆積が観察できた。VI層やVII層の堆積状況から、水田開墾以前の旧地形は、牛池川の浸食作用の影響を受けた、北西から南東へ下る緩傾斜地だったと推測できる。

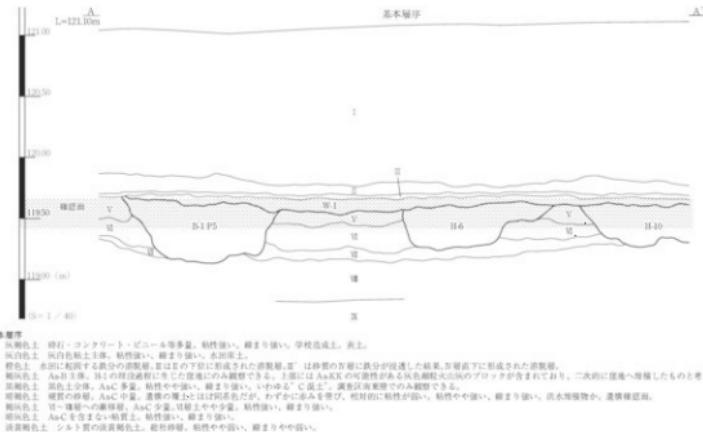


Fig. 5 基本層序

## V 遺構と遺物

### (1) 積穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 7・16, PL. 1・7)

位置 X 235・236, Y 48 主軸方向 (E - 19° - W) 規模 東西軸 (1.68) m・南北軸 (2.15) m・深さ 0.32 m。調査区北西端において住居跡西端部のみ調査。面積 (291) m<sup>2</sup> 覆土 最上層にIV層が堆積。床面 硬化面不明瞭。重複 H-3と重複。新旧関係はH-3→本遺構。カマド 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 積穴部の中央に不整形な掘り込みをもつと推測できる。底面はVI層。出土遺物 覆土中から土師器・須恵器の壊・甕が出土したが細片のため詳細不明。時期 IV層の堆積層位から、おおむね11世紀と推定する。

H-2号住居跡 (Fig. 7・8・16, PL. 1・2・7)

H-2は同一の竪穴部で新旧のカマドと床面をもち「改造」の住居跡と判断した。土層の堆積状況と付属施設

の重複関係から判断できる主な過程は、古段階床下土坑掘削→古段階床面（直床）・カマド構築→古段階カマド廃絶・新段階床下土坑掘削→新段階床面（貼床）構築→新段階カマド構築となる。ただし、新段階と古段階の出土器に型式的な差異は細分できず、「改築」の時間幅は短期間と推測できる。

#### 【H-2（新）】

位置 X 236、Y 48・49 主軸方向 W-8°-N 規模 東西軸（3.04）m・南北軸（3.81）m・深さ 0.40 m。北端は試掘時のトレンチにより確認できず。面積（8.70）m<sup>2</sup> 覆土 道構の直上はW-1に由来するAs-B混土層が被覆。覆土は全体的に焼土・灰・炭化物が多い。床面 カマド周辺にしまりのやや弱い硬化面。起伏が多く、東壁際は幅広の溝状に浅く窪む。重複 H-3、間接的にW-1と重複。新旧関係はH-3→本道構（古段階→新段階）→W-1。カマド 西壁北寄りで確認。全長（1.09）m・燃焼室内幅（0.33）m・煙道内幅（0.17）m。白色粘土で構築された天井→袖部が残存。内壁の被熱状況から、竪穴部壁面をあまり掘り込まない煙突状の短い煙道構造と判断した（卷頭図版2参照）。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 土層の堆積状況と古段階の床面硬化状況から、土坑1~4は新段階に伴う床下土坑と判断した。土坑1は長軸1.11m・短軸0.76m・深さ0.22m。土坑2は長軸0.90m・短軸0.63m・深さ0.15m。土坑3は長軸0.81m・短軸0.63m・深さ0.24m。土坑4は長軸1.21m・短軸0.88m・深さ0.53mで古段階の床下土坑1と重複する。いだれも不整橈円形のやや不規則な形で、粘質土化したIX層まで掘り込まれる。出土遺物 覆土中から2・6・8・13、床面直上から3・10・11・14・15、カマド内から18、土坑4から4が出土。2の灰釉陶器碗は大原2号窯式期の特徴をもつ。3の塊は酸化焰焼成で、同様の塊は本道構において主体を占める。6の小皿は口端部に油煙が付着し灯明具の可能性がある。10の土釜と11の鉢は旧段階の層位から出土した破片と接合する。18の塊形滓は底面が磁性。上端～底面まで一部が残存し直径は約8cmと小さい。時期 床面直上の出土遺物から11世紀前半と推定する。

#### 【H-2（古）】

位置 X 236、Y 48・49 主軸方向 E-8°-W 規模 東西軸 3.17 m・南北軸（3.81）m・深さ 0.45 m。北端は試掘時のトレンチにより確認できず。面積（8.70）m<sup>2</sup> 覆土 新段階の床面構築土である16層が古段階の覆土を兼ねる。床面 カマド周辺から竪穴部東半に直床の硬化面。西半は貼床。重複 H-3、間接的にW-1と重複。新旧関係はH-3→本道構（古段階→新段階）→W-1。カマド 東壁南寄りで確認。全長（1.05）m・燃焼室内幅不明・煙道内幅0.27m。底面は燃焼室と煙道の境が不明瞭で、煙出部にかけて緩く傾斜しながら立ち上がる。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 竪穴部南西隅に床下土坑1を確認。長軸1.39m・短軸1.03m・深さ0.68mで、新段階の土坑4と重複する。不整橈円形の不規則な形で、粘質土化したIX層まで掘り込まれる。出土遺物 覆土中から7・9・12・17、床面直上から11、カマド内から10、掘り方から5、床下土坑1から1が出土。1の縁祿陶器碗は硬質土で施釉は底部外面を除き全面におよぶ。底部内面には三叉トチンによる重ね焼き痕が残る。7の小皿は口端部に油煙が付着し灯明具の可能性がある。10の土釜と11の鉢は新段階の層位から出土した破片と接合する。12は残存部の形状と煤の付着状況から有頭形態の竈形土製品と判断した（VI章参照）。時期 出土遺物から11世紀前半と推定する。

#### H-3号住居跡（Fig. 8・9・16、PL. 2・7）

位置 X 236、Y 48 主軸方向（N-63°-E） 規模 東西軸（3.08）m・南北軸（3.40）m・深さ 0.68 m。調査区北東端において住居跡南西部のみ調査。面積（7.29）m<sup>2</sup> 覆土 道構の直上は10~11世紀の遺物包含層が被覆。覆土には角閃石安山岩の小粒が目立ち、中層以下には炭化物が目立つ。床面 壁際を除くほぼ全面にしまりのやや弱い硬化面。直上に炭化材が残存し焼失家屋の可能性がある。土坑1は床面を掘り込む。長軸0.60m・短軸0.55m・深さ0.07mで隅丸方形を呈する。火床面や灰層は確認できない。位置関係から南西の柱

穴の可能性もあるが浅い。重複 H-1・2と重複。新旧関係は本造構→H-2→H-1。カマド・炉確認できず。貯蔵穴 南西隅部に床面を掘り込む土坑が確認でき、構築位置から貯蔵穴と判断した。長軸 0.55 m・短軸 0.53 m・深さ 0.12 m。出土遺物はない。柱穴 確認できず。壁周溝 調査範囲では全周。掘り方 壁穴部の中心が弱く窪むと推測できる。西壁際には掘削工具痕が明瞭に観察できる。底面はIX層。出土遺物 覆土中から1~3が出土。1は内斜口縁坏の細片。時期 重複関係と出土遺物から5世紀末葉~6世紀初頭と推定する。

#### H-4号住居跡 (Fig. 9・10・17・18, PL. 2・3・7・8)

位置 X 235・236, Y 50・51 主軸方向 (E - 17° - W) 規模 東西軸 (5.03) m・南北軸 (6.61) m・深さ 0.21 m。調査区北側において住居跡東半のみ調査。面積 (19.14) m<sup>2</sup> 覆土 土質はVI層に似るが焼土や炭化物を含む。重複するH-5覆土に比べ全体的にやや暗色。床面 貼床。東壁際から竪穴部の北半にかけてしまりのやや弱い硬化面。17の台石は床面上直上出土で、東側に火床面を伴う浅い窪みが付く。窪みの覆土 (22-23層) や台石の表面に鍛造剥片等は確認できない。土坑1は床面を掘り込む。長軸 0.54 m・短軸 0.38 m・深さ 0.10 mで梢円形を呈する。重複 H-5・8・9, B-1, W-2, D-3~5と重複。新旧関係はH-8 (→D-5) →D-4 (→H-9) →W-2・D-3→本造構→H-5。カマド 東壁中央で確認。全長 150 m・燃焼室内幅 0.48 m・煙道内幅 0.29 m。白色粘土で構築された煙道天井部が一部残存。焚口部は内幅 0.39 mで、右袖には砂岩の加工材と12の平瓦、左袖には13の「方光」銘押印丸瓦を用い、それぞれ据え穴を掘り込んで設置する。煙道は長く底面は平坦で、壁面は被熱が顕著。崩落した構築材と判断できる礫群の直下から6の小皿が正位で出土。焚口部手前の覆土最下層には、砂岩の扁平な加工材が安置遺棄されており、本來は焚口部天井の懸架材だったと推測できる。構造と廃絶状況は、重複するH-5のカマドに似る。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 南半部は造構の重複が激しく、掘り方の詳細は判断し難い。カマド前面付近が不整形方に浅く窪む。底面はVI~VII層。床下土坑1・2は重複関係をもち、土坑1の方が古い。遺物の垂直分布状況から本造構の掘り方に伴う掘り込みと判断した。最終的に確認できたH-8床面での残存状況は、床下土坑1が長軸 (0.85) m・短軸 (0.76) m・深さ [0.65] m、床下土坑2が長軸 (0.69) m・短軸 (0.58) m・深さ [0.57] m。出土遺物 覆土中から2・3・5・9・10、床面上直上から7・17、カマド内から6、カマド構築材として12・13、カマド掘り方から16、掘り方から1・8・14・15が出土。1の縁付陶器碗は硬質素地で施釉は全面におよぶ。2の縁付陶器盤皿は軟質素地で施釉は全面におよぶ。3~5は灰釉陶器碗と皿で、3・5は光ヶ丘1号窯式期、4は大原2号窯式期の特徴をもつ。6~8は酸化焰焼成の小皿で、6に比べ7・8にはやや後出的な要素がみられる。9の須恵器鉢は口縁部が玉縁状を呈する。胎土は非常に精緻で、在地産須恵器類例を見出し難い(VI章参照)。11は残存部の形状から三足土器脚部の可能性がある。13の丸瓦は凸面の四隅に「方光」銘の押印がある。同一の印影をもつ瓦は、山王庵寺と元社總神明遺跡で確認されている(VI章参照)。時期 重複関係と床面上直上やカマド内の出土遺物から11世紀前半と推定する。

#### H-5号住居跡 (Fig. 11・18, PL. 3・8)

位置 X 234・235, Y 51・52 主軸方向 (E - 16° - W) 規模 東西軸 (4.11) m・南北軸 (4.75) m・深さ 0.12 m。住居跡西端は調査区外。南半部は旧地形の影響を受けて漸移的に消失。面積 (9.91) m<sup>2</sup> 覆土 土質はVI層に似るが焼土や炭化物を含む。重複するH-4覆土に比べ全体的にやや明色。床面 ほぼ直床。カマド前面にしまりの強い硬化面。南東壁際にしまりのやや弱い硬化面。重複 H-4・7・8, W-2, D-2・4・5と重複。新旧関係はH-8 (→D-5) →D-4→W-2→H-7→H-4→本造構→D-2。カマド 東壁で確認。全長 1.43 m・燃焼室内幅 0.42 m・煙道内幅 0.15 m。焚口部の左袖には砂岩の加工材を用い、据え穴を掘り込んで設置する。右袖付近は床面が浅く掘り込まれており、詳細は判断し難い。燃焼室の奥手には安山岩の割石が立位で残存しており、出土位置から支脚と判断した。煙道は長く底面は平坦で、壁面は被熱が顕著

著。崩落した構築材と判断できる礫群とともに3の高台付塊が出土。焚口部手前の床面直上には、砂岩の扁平な加工材が破損遺棄されており、本来は焚口部天井の懸架材だったと推測できる。構造と廃絶状況は、重複するH-4のカマドに似る。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 床下土坑等は確認できない。底面はⅤ層。出土遺物 覆土中から1・2、床面直上から4、カマド内から3が出土。1の灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式期ないし黒雀90号窯式期の特徴をもつ。2・3の高台付塊は高台径が非常に小さく、胎土も非常に粗い。4の小皿は扁平で底径が大きく、見込部に強い指頭圧痕列が残る。地域編年の標識資料である鳥羽遺跡B区332号土坑出土資料と同型式と判断できる。時期 重複関係と床面直上やカマド内の出土遺物から11世紀後半と推定する。

#### H-6号住居跡 (Fig.12・18, PL. 3・4・8)

位置 X 235・236, Y 51・52 主軸方向 (E - 45° - W) 規模 東西軸 (4.42) m・南北軸 (4.24) m・深さ 0.33 m。調査区北端において住居跡西端のみ調査できた。面積 (15.41) 覆土 遺構の直上は9~11世紀の遺物包含層が被覆。覆土はAs-Cや角閃石安山岩の小粒を含む。床面 北半は貼床。部分的にしまりの強い硬化面。重複 H-10, B-1, D-2と重複し、新旧関係はH-10→本遺構→B-1 (→遺物包含層) →D-2。カマド 土坑1は床面を掘り込む。長軸 (0.56) m・短軸 0.55 m・深さ 0.05 mで梢円形を呈する。底面は弱く被熱し、覆土は焼土・炭化物・灰を含む。カマドに関連する掘り込みの可能性がある。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 壁穴部中央が不整形に窪む。底面はⅥ層。床下土坑1は長軸 0.53 m・短軸 0.44 m・深さ 0.13 m、床下土坑2は長軸 0.54 m・短軸 0.50 m・深さ 0.15 m。いずれも円形で浅く、Ⅵ層を底面とする。出土遺物 覆土中から3、床面直上から2、掘り方から1が出土、1は覆土中から出土した破片と接合する。底部の小径化はさほど進んでいないが、糸切り後は無調整で二次底部面を残す。2は北西壁際の床面に逆位で安置遺棄されていた。器面は使用による磨耗がなく、ざらつきがある。小型の武藏型「くの字」壺だが口縁部の外反は弱い。時期 重複関係と出土遺物から9世紀前半と推定する。

#### H-7号住居跡 (Fig.11・18, PL. 4・8)

位置 X 234, Y 52 主軸方向 (E - 18° - W) 規模 不明。調査区西端においてカマド煙道のみ調査できた。面積 不明 重複 間接的にH-5と重複し、新旧関係は本遺構→H-5。覆土 確認できず。床面 確認できず。カマド 煙道のみ調査。全長不明・燃焼室内幅不明・煙道内幅 (0.18) m。底面に火床面と灰層が確認できる。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 確認できず。出土遺物 カマド内から出土した1の須恵器环は、糸切り後は無調整で底径が小さい。時期 重複関係と出土遺物から9世紀後半と推定する。

#### H-8号住居跡 (Fig.13・18, PL. 4・8)

位置 X 235, Y 50・51 主軸方向 (N - 65° - E) 規模 東西軸 (2.77) m・南北軸 (3.60) m・深さ 0.33 m。調査区西端において住居跡南東部のみ調査。面積 (531) m<sup>2</sup> 覆土 As-C・Hr-FA・角閃石安山岩の小粒を含む。上層に重複するH-4に比べ全体的に暗色。床面 貼床で、カマド・貯蔵穴の前面から竪穴部中央にかけてしまりの強い硬化面。炭化物が面的に分布し焼失家屋の可能性がある。南壁際中央付近に、緩い段状の掘り残し部をもつ。重複 H-4・5・9, W-2, D-4・5と重複。新旧関係は本遺構 (→D-5) →D-4 (→H-9) →W-2→H-4→H-5。カマド 東壁南寄りで確認。全長 0.73 m・燃焼室内幅 (0.32) m・煙道内幅 (0.30) m。Ⅸ層土ブロックの混土を用いた左袖が残存。右袖はH-4床下土坑1・2と調査時のサブトレレンチにより消失。燃焼室底面に弱い火床面。煙道は竪穴部壁面を掘り込まず、壁面に焼土化が確認できる。掘り方には、左袖の直下に転ぼし根太ないし間仕切り溝状の小溝が確認でき、カマド構築以前は壁際に別の施設が構築されていたと推測できる。貯蔵穴 南東隅部に床面を掘り込む土坑が確認でき、構築位置から貯蔵穴と判断した。長軸 0.77 m・短軸 0.61 m・深さ 0.58 m。隅丸方形で上端に浅いテラス状の段が付く。

覆土は焼土・炭化物・灰を多く含む。土師器壺の破片が出土した。柱穴 構築位置からP 1は南東の柱穴と判断した。長軸 0.37 m・短軸 0.33 m・深さ 0.53 mで方形。壁周溝 東壁際に確認できる。カマドと重複し、壁周溝の掘削後にカマドが構築される。掘り方 転ばし根太なし間仕切り溝状の小溝が確認できる。底面はIX層。出土遺物 覆土中から1~3が出土。1・2は内斜口縁环。時期 重複関係と出土遺物から5世紀末~6世紀初頭と推定する。

#### H-9号住居跡 (Fig.13・14・18, PL. 4・8)

位置 X 236, Y 51 主軸方向 E - 48° - W 規模 不明。重複する複数の遺構に破壊されており、カマドのみ調査できた。面積 不明 覆土 確認できず。床面 確認できず。重複 H-4・8, B-1, W-1・2, I-1, D-3と重複。新旧関係はH-8(→本遺構)→W-2・D-3→H-4→W-1・I-1。カマド 東壁で確認。全長 134 m・燃焼室内幅 (0.41) m・煙道内幅 0.15 m。VI層を掘り抜いて構築された煙道天井部が一部残存。VI層を掘り残した左袖の基部がわずかに残存。右袖はH-4に破壊される。煙道は長く底面は平坦で、壁面は被熱が顯著。構造はH-4・5のカマドに似る。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 確認できず。出土遺物 H-4掘り方から出土した1・2は本遺構から混入した可能性がある。1の土師器壺はいわゆる真間式系の半球形壺で、口縁部はやや外傾し、口縁部と底部外面の境に無調整帯を残す。2の須恵器壺は口端部の直下に断面三角形の凸帯を付す。3の白玉は重複するH-8から混入した可能性がある。時期 重複関係と出土遺物から8世紀後半と推定する。

#### H-10号住居跡 (Fig.12, PL. 5)

位置 X 236, Y 52 主軸方向 (N - 59° - E) 規模 東西軸 (3.61) m・南北軸 (1.05) m・深さ 0.80 m。調査区南端において住居跡北端のみ調査できた。面積 (2.00) nf 覆土 上層にHr-FAが堆積する。下層は炭化物が多く、焼失家屋の可能性がある。床面 貼床だが硬化面は不明瞭。重複 H-6と重複し、新旧関係は本遺構→H-6である。カマド・炉 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 北東隅部が浅く窪む。出土遺物 覆土中から土師器壺・高杯・壺・須恵器壺が少量出土したが細片のため詳細不明。時期 Hr-FAの堆積層位や重複関係と出土遺物からおおむね5世紀と推定する。

### (2) 堀立柱建物跡

#### B-1号堀立柱建物跡 (Fig.14, PL. 5)

位置 X 236, Y 50-51 主軸方向 N - 8° - W 規模 東西軸 (4.28) m・南北軸 (2.32) m。東側は調査区外、北側は重複するW-1によって消失するが、絶柱式と推測できる。柱穴 5基調査した。P 1は長軸 0.61 m・短軸 0.60 m・深さ 0.58 m、P 2は長軸 0.68 m・短軸 0.37 m・深さ 0.60 m、P 3は長軸 0.57 m・短軸 0.43 m・深さ 0.42 m、P 4は長軸 0.66 m・短軸 0.44 m・深さ 0.61 m、P 5は調査区裏面で確認したため平面形状不明。深さ 0.49 m。芯々距離は桁行 1.87 m・梁行 1.50 m。底面標高は118.79 m~119.06 m。覆土 いずれの柱穴覆土も、As-Cが混入する黒褐色土を主体とする。重複 H-4・6・9・W-1と重複。新旧関係は(H-9→)H-6→本遺構→H-4→W-1。出土遺物 覆土中から土師器・須恵器の壺・壺が出土したが細片のため詳細不明。時期 重複関係から、おおむね9世紀後半~10世紀前半と推定する。

### (3) 溝跡

#### W-1号溝跡 (Fig.14・18, PL. 5・8)

位置 X 236・237, Y 50 主軸方向 E - 20° - W 規模 長さ (6.14 m)・上幅 2.76 m・下幅 1.89 m・深さ 0.58 m 形状等 東西に走向する。断面U字状。重複 H-9・B-1・I-1・D-1と重複。新旧関係はH-9→B-1・D-1→本遺構・I-1。I-1は本遺構の谷頭部に位置し覆土は同質であり、本遺構に付属する施設と判断した。覆土 As-Bを多く含む。出土遺物 埋没時期に伴う遺物はなく、いずれも周囲

からの混入と判断した。1の須恵器は鉄鉢形土器。 時期 覆土に As-B を多く含むことから、おおむね 12世紀以降と推定する。

#### W-2号溝跡 (Fig.15・18・19, PL. 5・8)

位置 X 235, Y 50 ~ 52 主軸方向 N - 14° - E 規模 長さ (8.03 m) ・上幅 1.01 m ・下幅 0.54 m ・深さ 0.44 m 形状等 南北に走向する。断面U字状。 重複 H - 4・5・8・9と重複。新旧関係は H - 8 (→ H - 9) →本遺構 → H - 4 → H - 5。 覆土 炭化物を多く含む。葉理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は確認できない。 出土遺物 覆土中から 1 ~ 3・5・7・9 ~ 11、底面直上から 4・6・8 が出土。1の縁釉陶器は硬質素地で施釉は外側におよぶ。2・3は灰釉陶器碗で、2は折戸 53号窯式期、3は大原 2号窯式期の特徴をもつ。4・7の須恵器は糸切り後無調整で底径小さい。8の須恵器は高足高台。5 ~ 6の壺・塊は酸化焰焼成で、同様の塊は本遺構において主体を占める。 時期 重複関係と出土遺物から 10世紀前半と推定する。

#### (4) 井戸、土坑、ピット (Fig.15・19, PL. 5・6・9)

I - 1 は W - 1 の谷頭部に位置し覆土は同質であり、W - 1 に付属する施設と判断した。

D - 3 は位置・重複関係から W - 2 に関連する溝跡の一部の可能性がある。

D - 4 は大型の柱穴の可能性がある。

D - 5 は D - 4 に切られ、覆土は埋戻しの様相を示す。位置関係と覆土の様相からは D - 5 から D - 4 への柱の差し替えが推測でき、遺構の重複関係も鑑みると、D - 5 には 7 ~ 8世紀代の大規模な方形の柱穴である可能性を想定できる。しかし周囲に対となる柱穴は確認できず、調査区外の問題もあり、掘立柱建物跡の柱穴かどうかは、現状では判断し難い。

なお、各遺構の計測値については、Tab. 2 に示す。

#### (5) 遺構外出土遺物 (Fig.19, PL. 9)

1 ~ 3 は遺構外や古墳・平安時代の遺構覆土中から出土した。1は繩文時代前期後葉の諸磯 b 式、2は晩期の安行 3 b ないし 3 c 式の可能性がある。3は人物埴輪の腕基部か。4の須恵器高台付壺は削り出し高台。調査区外で採集しており、周間に 7世紀後半の遺構が存在する可能性を示す。6の高台付壺は高台径が非常に小さく、胎土も非常に粗い。W - 1 周辺に堆積した包含層から出土した。

Tab. 2 井戸、土坑、ピット計測表

| 遺構名   | 位 置                   | 長軸   | 短軸   | 深さ   | 平面形状  | 主な遺物                | 時 期          | 備 考  |
|-------|-----------------------|------|------|------|-------|---------------------|--------------|--|
| I - 1 | 3 25°<br>3 30°        | 1.12 | 1.06 | 0.20 | 円形    |                     | 平安時代<br>古墳時代 | As-B 合成<br>As-C  |
| D - 1 | 3 25°<br>3 30°<br>30° | 0.28 | 1.10 | 0.62 | 不整形   | 円筒形<br>筒型埴輪<br>筒型埴輪 | 平安時代<br>古墳時代 | As-C, Hg-PA を含む。<br>As-C, Hg-PA を含む。                     |
| D - 2 | 3 25°                 | 0.82 | 0.39 | 0.26 | 圓角正方形 |                     | 平安時代<br>古墳時代 | As-B 合成<br>As-C, Hg-PA を含む。                              |
| D - 3 | 3 25°                 | 0.67 | 0.67 | 0.47 | 不整形   | 円筒形<br>筒型埴輪         | 平安時代<br>古墳時代 | As-C, Hg-PA を含む。<br>As-C, Hg-PA を含む。                     |
| D - 4 | 3 25°<br>3 30°        | 1.07 | 0.80 | 0.57 | 不規    |                     | 繩文時代<br>古墳時代 | As-C, Hg-PA を含む。<br>As-C, Hg-PA を含む。<br>As-C, Hg-PA を含む。 |
| D - 5 | 3 25°<br>3 30°        | 0.96 | 0.60 | 1.23 | 方形    |                     | 繩文時代<br>古墳時代 | As-C, Hg-PA を含む。<br>As-C, Hg-PA を含む。                     |
| P - 1 | 3 25°                 | 0.60 | 0.57 | 0.41 | 円形    | 須恵器小壺               | 平安時代<br>古墳時代 | As-C, Hg-PA を含む。   |

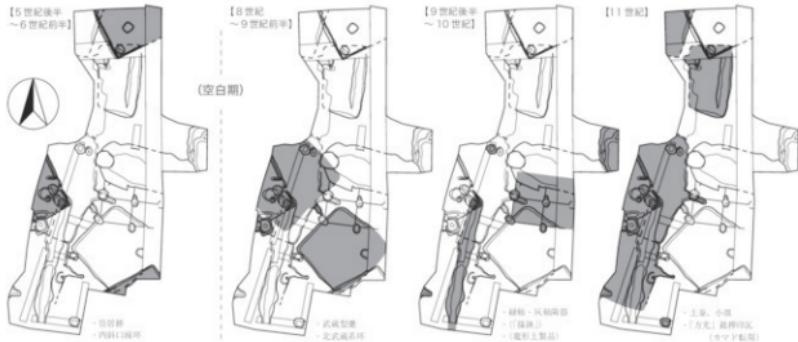


Fig. 6 時期別遺構分布 (5 ~ 11世紀)

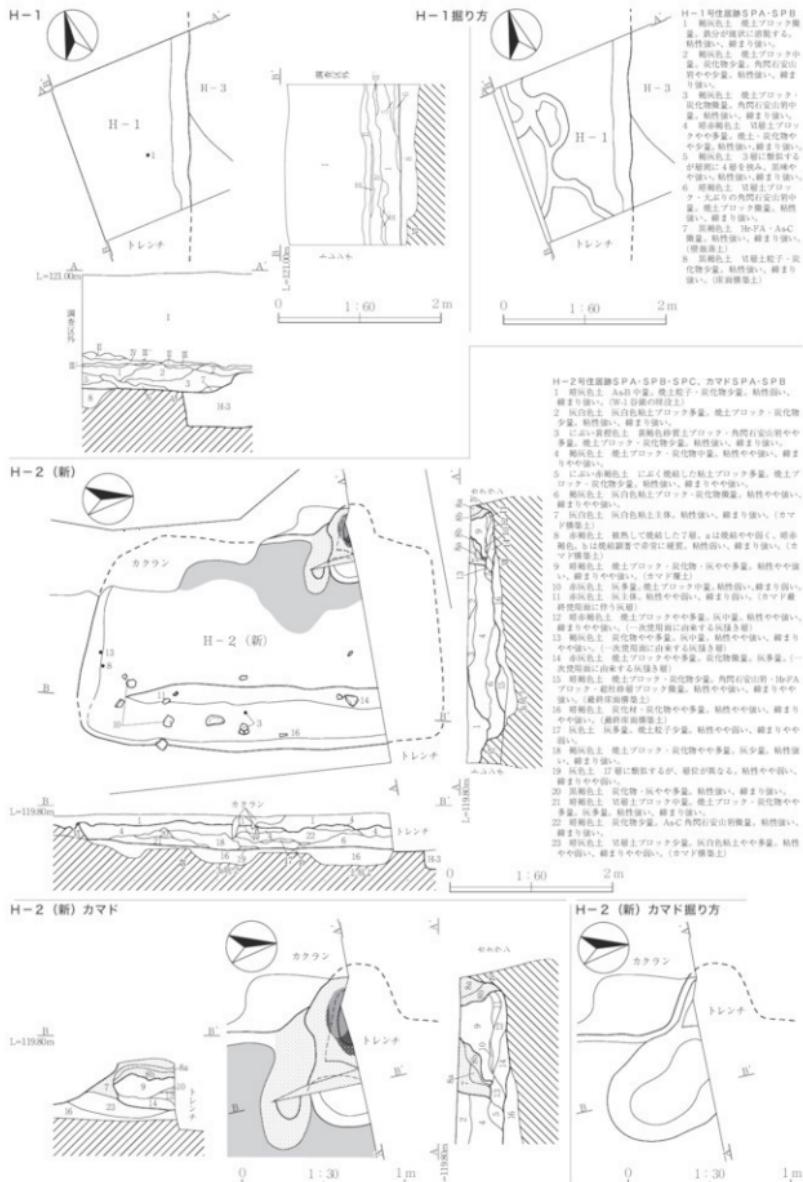
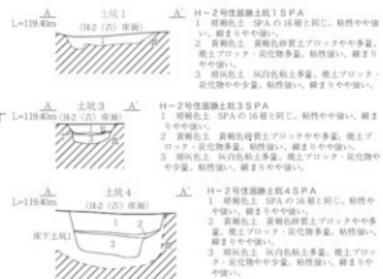
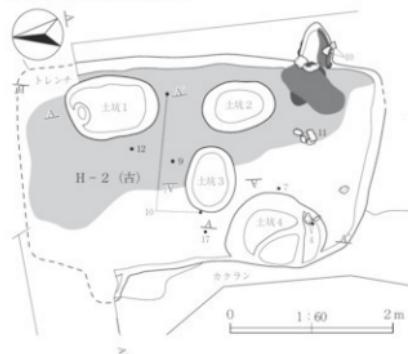
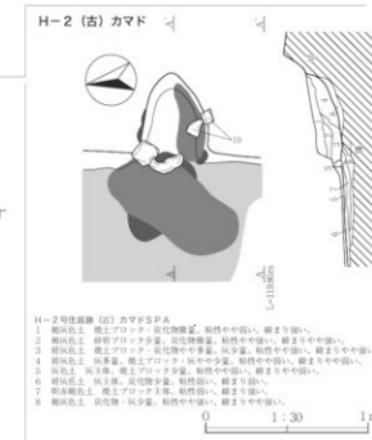
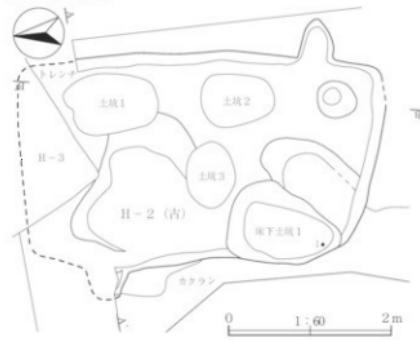


Fig. 7 H-1号住居跡, H-2号住居跡①

H-2(新) 挖り方・H-2(古)



H-2(古) 挖り方



H-3

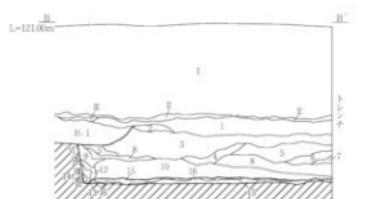
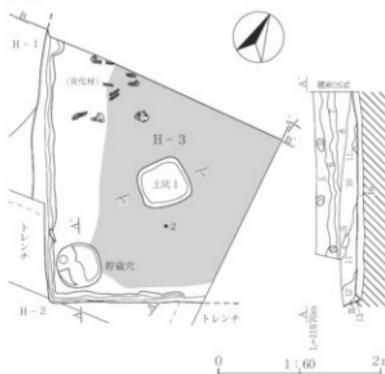
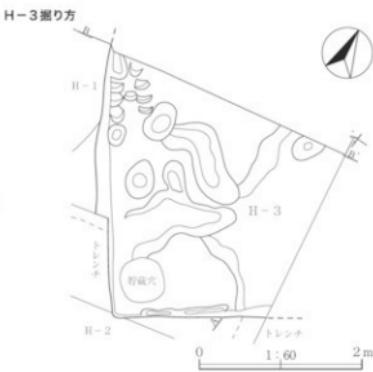
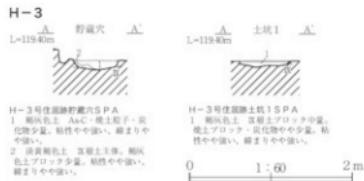


Fig.8 H-2号住居跡②、H-3号住居跡①



H-4 号付高砂土乾土SPA  
 1 細灰土色 灰白色粘土ブロック中量。  
 焼土・炭化物少量。粘性やや強い。締まりやや強い。  
 2 粗褐色土 焼土ブロック・炭化物やや多量。  
 粘性やや強い。締まりやや強い。  
 3 喀色土 茶褐色土主体。焼土ブロック・  
 炭化物少量。強性強い。締まり強い。

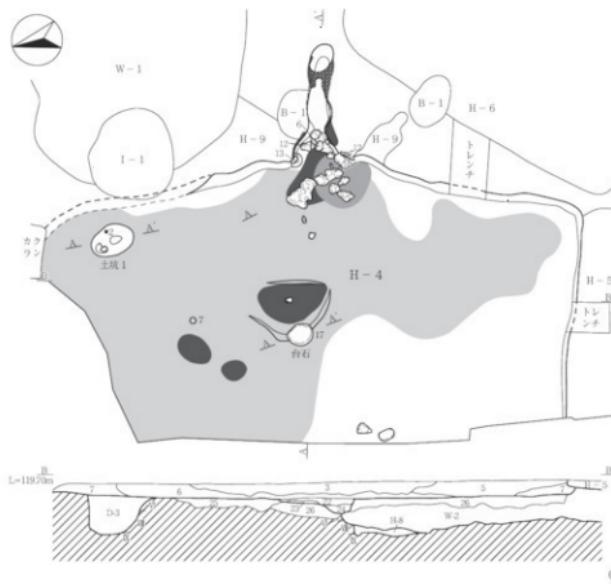
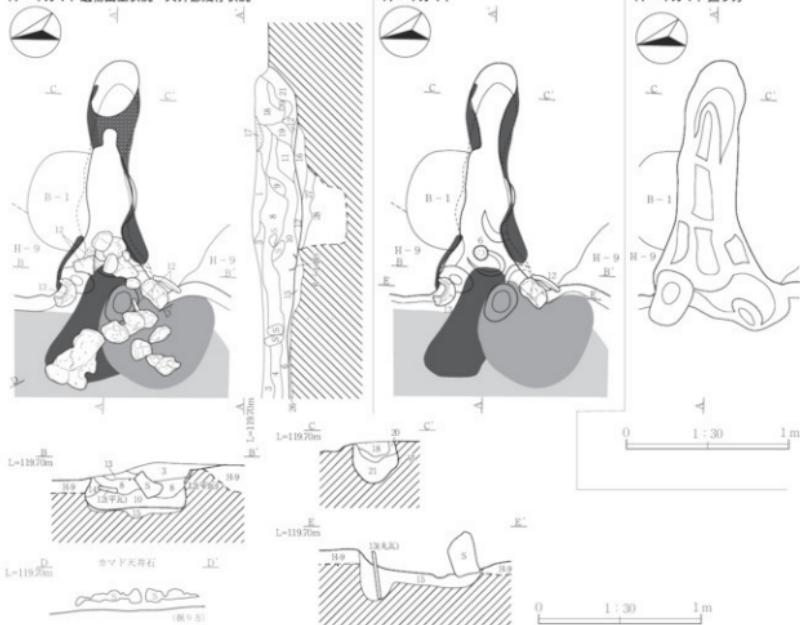
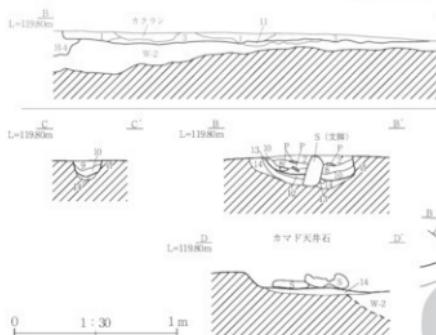
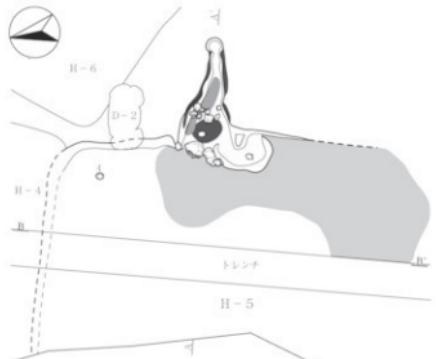


Fig. 9 H=3 住居跡②, H=4 号住居跡①

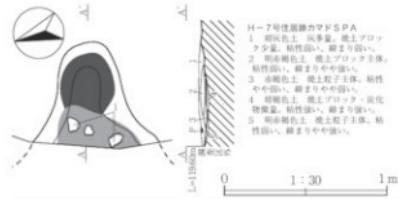
H-4 カマド遺物出土状況・天井部残存状況



H-5



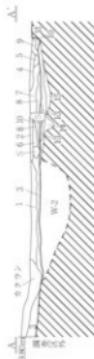
H-7 カマド



H-7 カマド掘り方

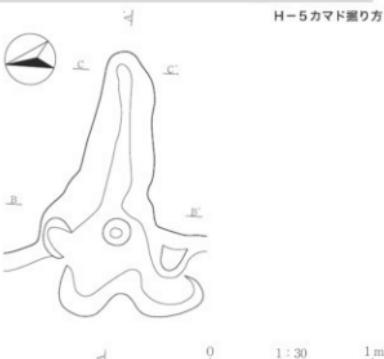
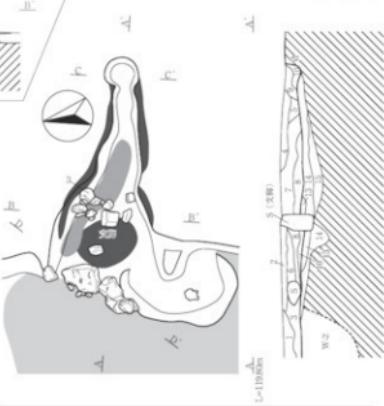


Fig.11 H-5・7号住居跡



1. 黄褐色土、灰化物少量、地土プロック・As-C少量、角石類微量、粘性弱い、縮まり弱い。
2. 明赤褐色土、地土プロック少量、灰化物微量、地土プロック少量、粘性弱い、縮まり弱い。
3. 黄褐色土、灰化物少量、粘性弱い、縮まり弱い。(カマド掘り方推定)
4. 黄褐色土、地土プロック少量、灰化物少量、地土プロック少量、粘性弱い、縮まり弱い。
5. 黄褐色土、灰化物少量、粘性弱い、縮まり弱い。(カマド掘り方推定)
6. 深褐色土、灰化物微量、地土プロック少量、地土プロック少量、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(カマド掘り方推定)
7. 深褐色土、As-C、灰化物少量、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(カマド掘り方推定)
8. 深褐色土体、地土プロック微量、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(カマド掘り方推定)
9. 深褐色土、灰化物微量、地土プロック少量、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(カマド掘り方推定)
10. 黄褐色土、灰多量、地土粒子少、灰化物微量、粘性やや強い、縮まりやや強い。(カマド掘り方推定)
11. 黄褐色土、地土粒子少、灰化物微量、粘性やや強い、縮まりやや強い。(カマド掘り方推定)
12. 深褐色土、灰化物微量、地土プロック少量、粘性やや弱い。(カマド掘り方推定)
13. 深褐色土、地土粒子少、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(大堀切)
14. 黑褐色土、地土プロック少量、灰化物微量、粘性やや弱い、縮まりやや弱い。(黒堀切上)

H-5 カマド



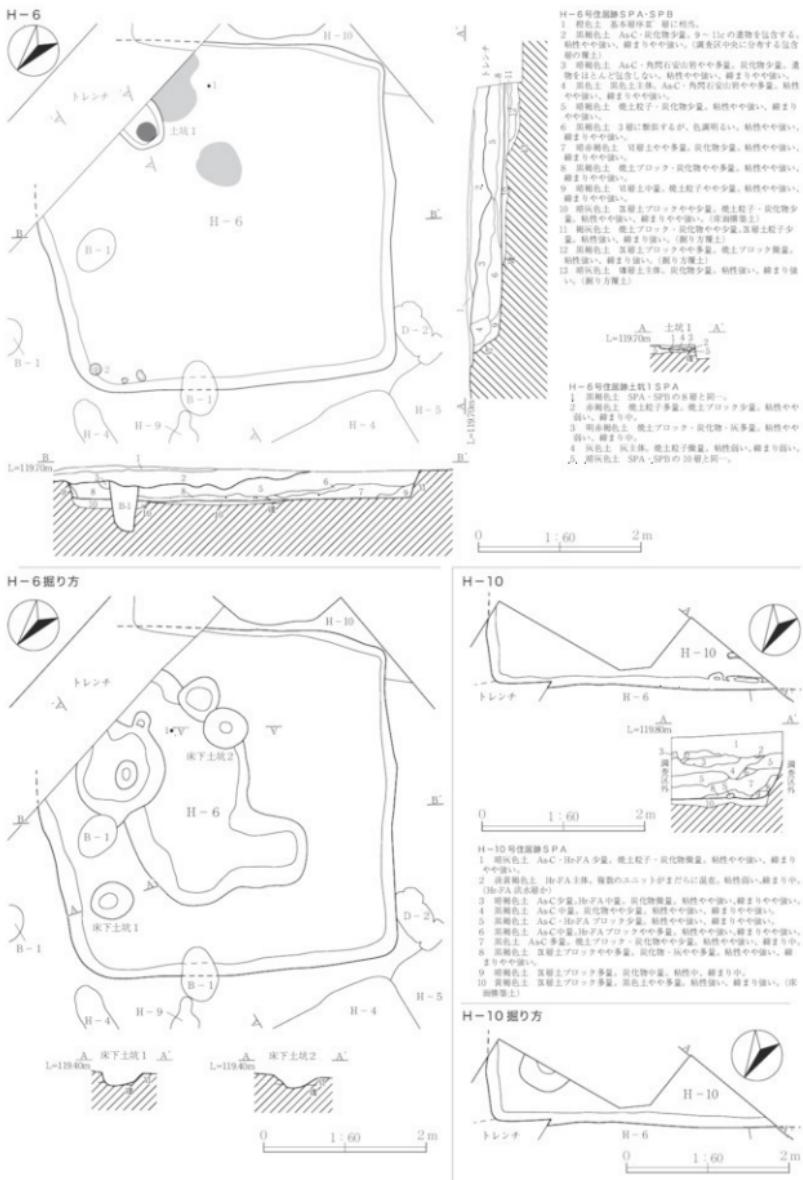


Fig.12 H-6·10号住居跡

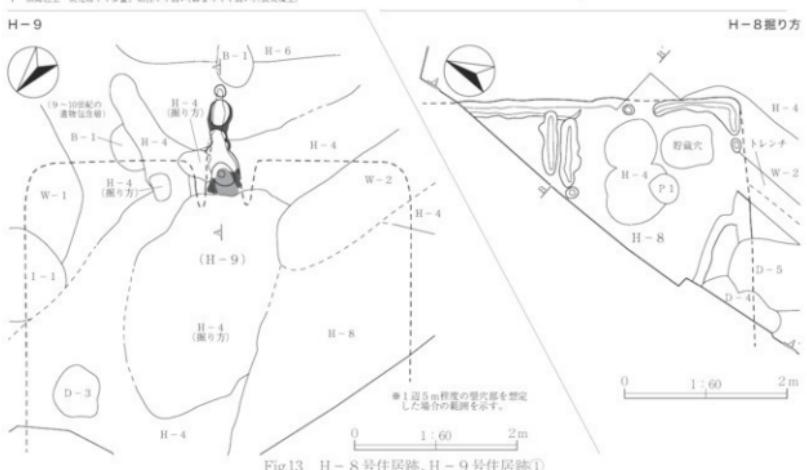
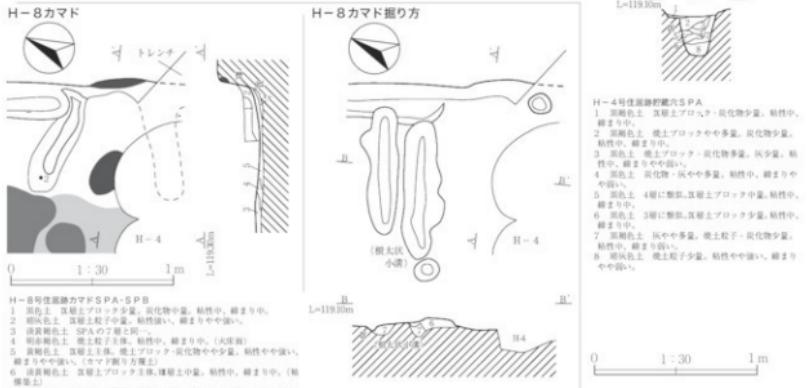
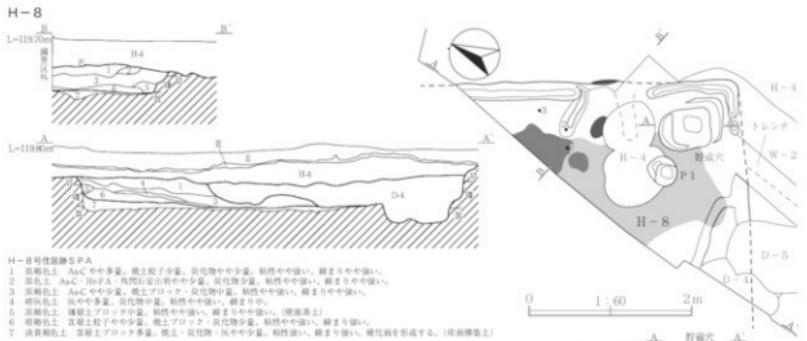
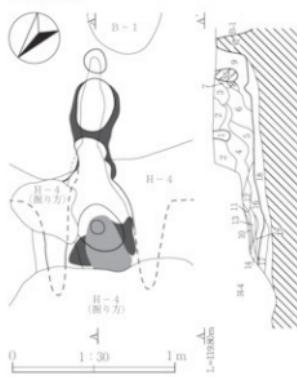
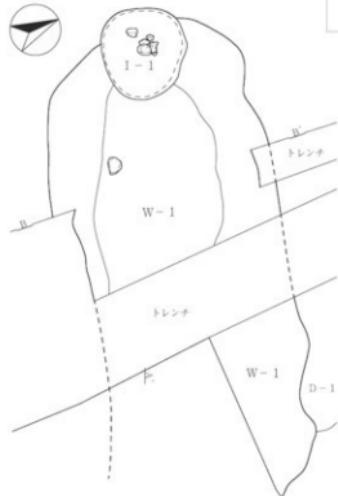


Fig.13 H-8号住居跡、H-9号住居跡①

H-9カマド



W-1, I-1



B-1

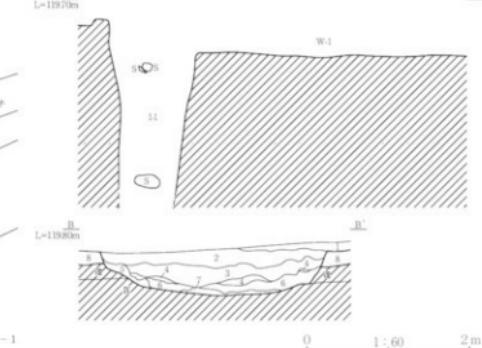
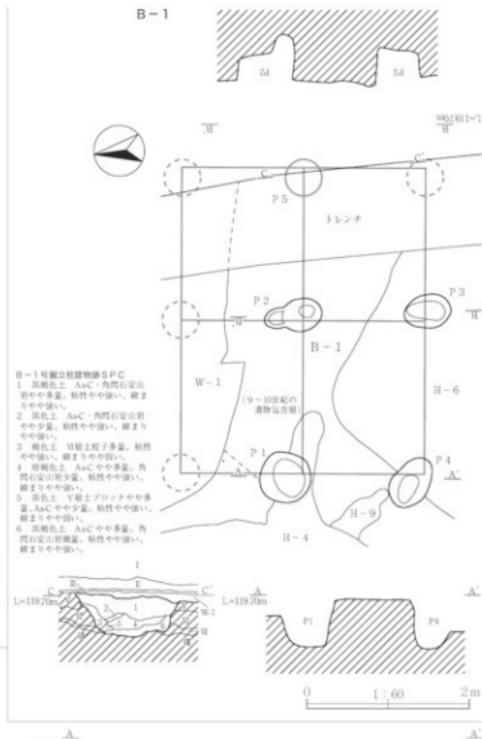


Fig.14 H-9号居住跡②、B-1号掘立柱建物跡、W-1号溝跡、I-1号井戸

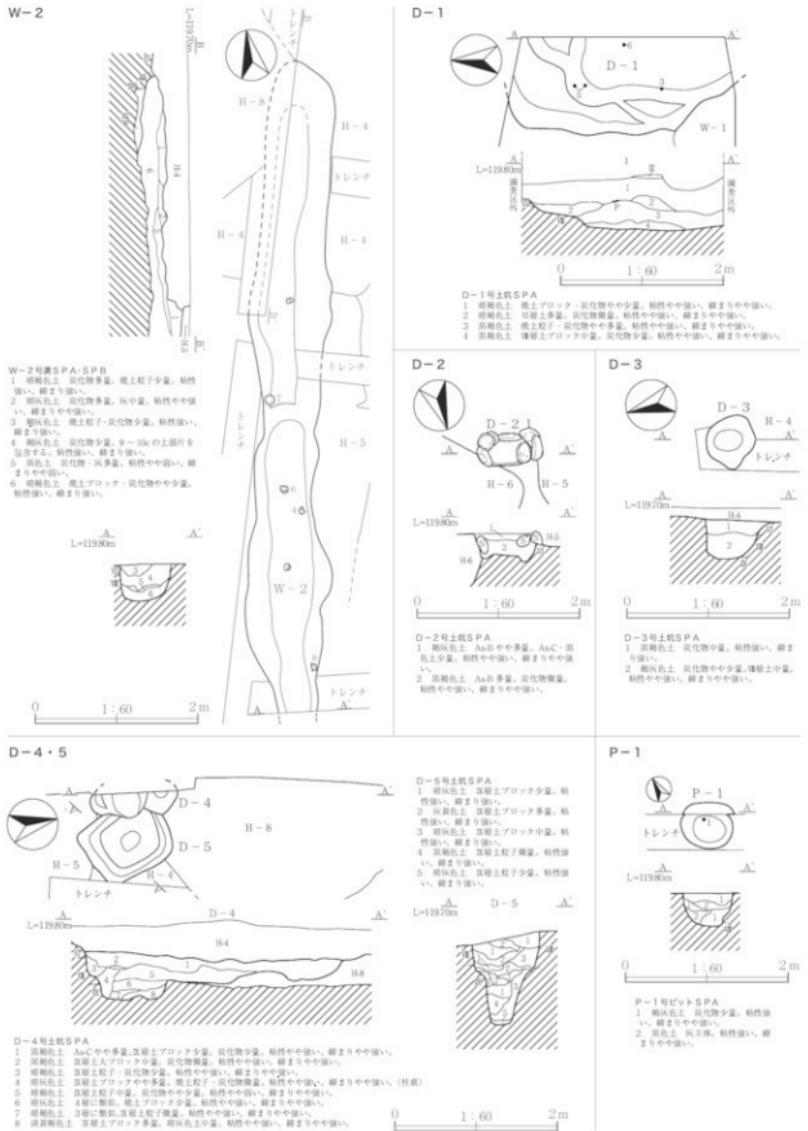


Fig.15 W-2号溝跡、D-1~5号土坑、P-1号ピット



Fig.16 H-1 ~ 3号住居跡出土遺物

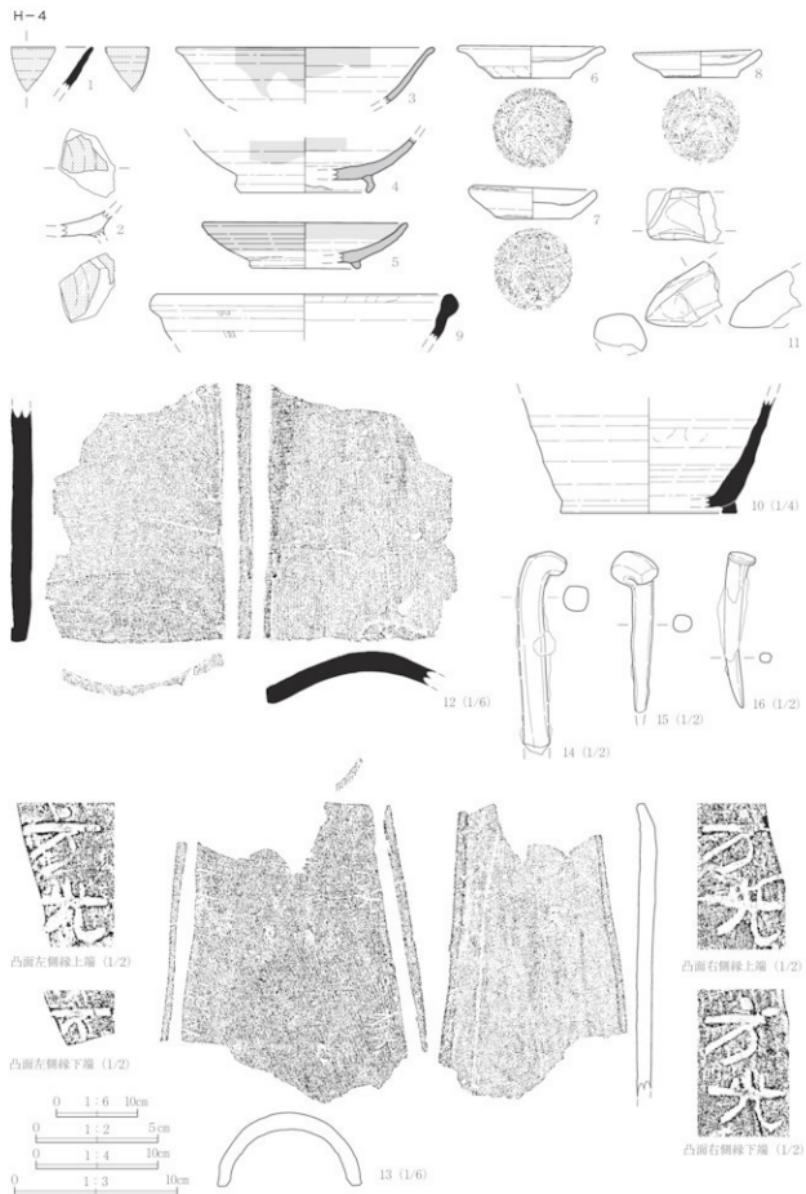


Fig.17 H-4号住居跡出土遺物

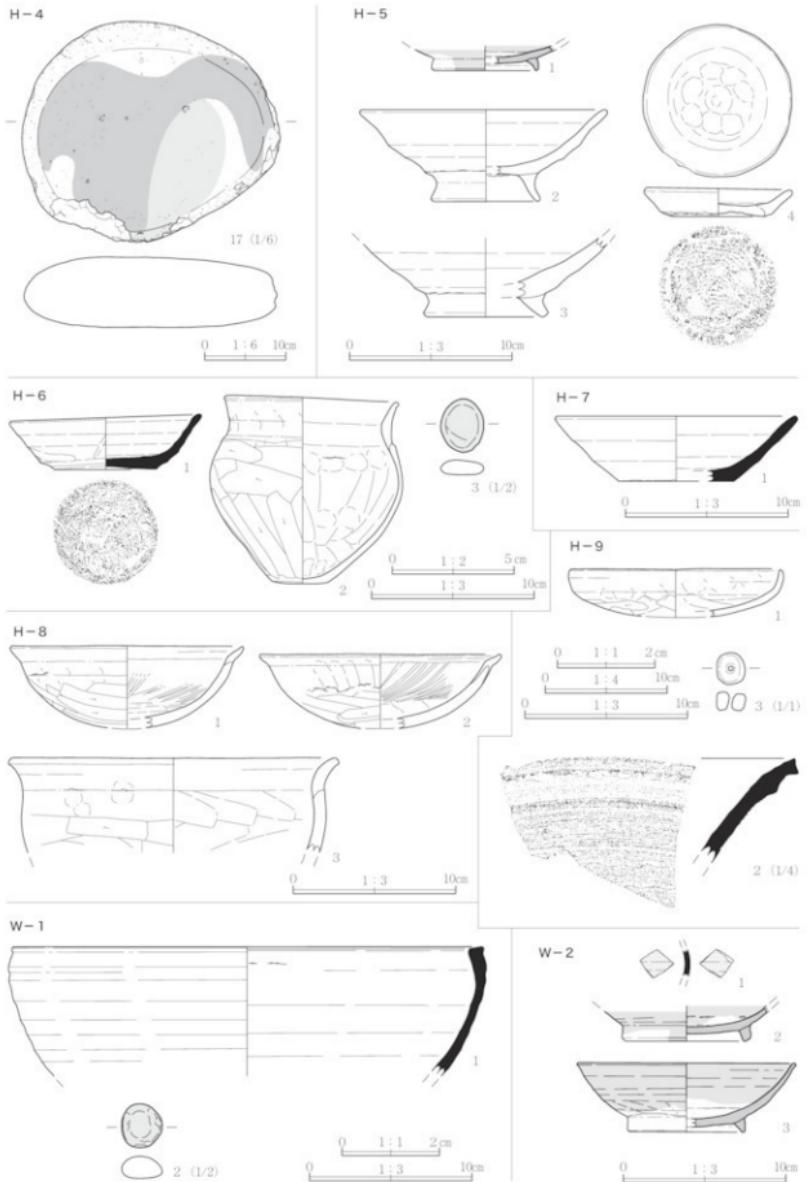


Fig.18 H-4 ~ 9号住居跡、W-1・2号溝跡出土遺物

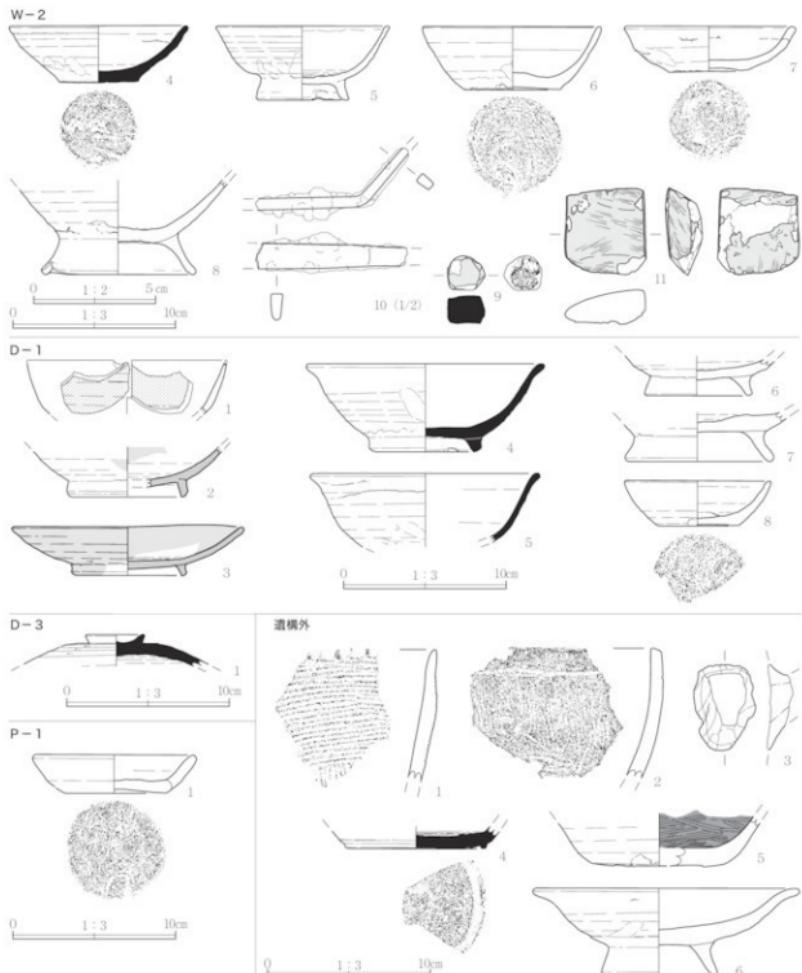


Fig.19 W-2号溝跡、D-1・3号土坑、P-1号ピット、遺構外出土遺物

Tab. 3 出土遺物観察表

H-1

| No | 出土位置 | 種別、形態       | 口径    | 底径 | 高さ | 幅 | 厚さ | 材質 | 焼成 | 色調 | 重量    | 形状、成・整形、文様等の特徴   | 現存状況・備考  |
|----|------|-------------|-------|----|----|---|----|----|----|----|-------|------------------|----------|
| 1  | 36.1 | 鉢形、無縁<br>不明 | (6.1) | 17 | 11 | 直 | —  | —  | —  | —  | 33.2g | 扁平一凸模状の断面形状を呈する。 | 現存：焼成済者。 |

H-2

| No | 出土位置  | 種別、形態     | 口径 | 底径   | 高さ   | 幅 | 厚さ                        | 材質                                   | 焼成   | 色調                 | 形状、成・整形、文様等の特徴 | 現存状況・備考 |
|----|-------|-----------|----|------|------|---|---------------------------|--------------------------------------|--|--------------------|----------------|---------|
| 1  | No.20 | 縦割高脚<br>鉢 | —  | [62] | [16] | 直 | 高脚部無し、<br>内部無焼成、<br>表面無漆皮 | 外：赤褐色<br>内：赤褐色                       | 外：クロナザ、點付高脚。後一高脚部邊縫隙無施釉。<br>内：クロナザ、足下ランダム。底部無焼成、乳頭無緑色。 | 現存：焼成済者。           |                |         |
| 2  | 現上    | 横割高脚<br>鉢 | —  | [78] | [13] | 直 | 白色無漆皮、<br>表面無漆皮           | 外：クロナザ、點付高脚。口縁一部外側施釉。施釉方法不明。<br>内：白色 | 外：クロナザ、點付高脚。底部無施釉。<br>内：白色                             | 現存：<br>未発達、大器2号式期。 |                |         |

| No | 出土位置                  | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ           | 材質                        | 形状       | 色調   | 形態、成・整形、文様等の特徴   | 残存状況・備考                |         |
|----|-----------------------|-----------|--------|--------|--------------|---------------------------|----------|--|--|------------------------|---------|
| 3  | No.2122               | 漆器漆<br>底  | (12.2) | 41     | 42           | 白・黒・赤<br>灰・白              | やや<br>厚  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。               | 1/2残存。<br>地化現れ風。       |         |
| 4  | No.3647               | 漆器漆<br>底  | 44.5   | 67     | 50           | 白・黒・赤<br>灰・白              | やや<br>厚  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。二次底部削痕。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。        | 1/2残存。<br>地化現れ風。       |         |
| 5  | 剥り方<br>底              | (12.2)    | (60)   | 44     | 白・黒・赤<br>灰・白 | やや<br>厚                   | 内面<br>外側 | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。 | 1/2残存。<br>地化現れ風。   |                        |         |
| 6  | 剥上<br>小皿              | (82)      | —      | (25)   | 白色粒          | 白<br>不真<br>正              | 内面<br>外側 | 内面：ロクナガ。上縁面部付近有削痕。<br>外側：ロクナガ。上縁面部付近有削痕。     | 地化現れ風。灯貝具。   |                        |         |
| 7  | No.35                 | 漆器漆<br>小皿 | (95)   | (32)   | 23           | 白・黒・赤<br>灰・白              | やや<br>厚  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。               | 1/4残存。<br>地化現れ風。灯貝具。   |         |
| 8  | No.7                  | 漆器漆<br>小皿 | (89)   | (43)   | 23           | 白・黒・赤<br>灰・白              | やや<br>厚  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。               | 1/2残存。<br>地化現れ風。       |         |
| 9  | No.40                 | 漆器漆<br>小皿 | (60)   | (58)   | 25           | 白・黒・赤<br>灰・白              | やや<br>厚  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。               | 1/2残存。<br>地化現れ風。       |         |
| 10 | No.23.10.<br>27.39.64 | 漆器漆<br>工具 | (26.2) | —      | (12.1)       | 白・黒・赤<br>灰・白              | 良好       | 内面<br>外側                                     | 内面：上縁部ロクナガ。脚部底面ビダード。<br>外側：上縁部ロクナガ。脚部底面ビダード。削す跡留スビダード。     | 1/2残・側面1/4残存。          |         |
| 11 | No.26.23              | 漆器漆<br>鉢  | (22.7) | (36)   | (15.6)       | 白・黒・石<br>灰・白<br>小皿        | 良好<br>好  | 内面<br>外側                                     | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。               | 1/4残存。                 |         |
| 12 | No.41                 | 漆器漆<br>小皿 | —      | —      | (47)         | 白・黒・赤<br>灰・白<br>灰・白<br>小皿 | 良好       | 内面<br>外側                                     | 内面：上縁部ロクナガ。底部斜面付近有削痕。脚部ビダード。削す跡<br>留スビダード。<br>外側：ハラナガ。復元前。 | 側面1部残存。                |         |
| No | 出土位置                  | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ           | 材質                        | 形状       | 色調   | 形態、成・整形、文様等の特徴   | 残存状況・備考                |         |
| 13 | No.8                  | 漆<br>平皿   | (79)   | (81)   | 17           | 赤色粒、小球<br>灰・白             | 極厚       | 内面<br>外側                                     | 内面：底面有削痕。内縁部有削痕。輪郭ヘラタケリ。板舌有。布目微。                           | 破片。                    |         |
| 14 | No.18                 | 漆<br>平皿   | (14.8) | (33.0) | 23           | 漆器漆<br>直筒                 | 直筒       | 内面<br>外側                                     | 内面：底面有削痕。内縁部有削痕。輪郭ヘラタケリ。板舌有。                               | 破片。                    |         |
| No | 出土位置                  | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ           | 材質                        | 形状       | 色調   | 形態、成・整形、文様等の特徴   | 残存状況・備考                |         |
| 15 | 剥上<br>漆器漆<br>鉢        | (27)      | 31     | 1.55   | 紺継粒          | 白<br>不真<br>正              | 内面<br>外側 | 内面：内縁部有削痕。                                   | 内面：内縁部有削痕。   | 現行。                    |         |
| No | 出土位置                  | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ           | 石材                        | 形状       | 色調   | 重量   | 形態、成・整形、文様等の特徴         | 残存状況・備考 |
| 16 | No.29                 | 石製<br>石臼  | (98)   | 39     | 31           | 青田石<br>灰・白                | 圓筒       | 内面<br>外側                                     | 900g   | 900g                   | 1/2残存。  |
| 17 | No.49                 | 石製品<br>石臼 | 120    | 56     | 28           | 青田石<br>灰・白                | 圓筒       | 内面<br>外側                                     | 300g   | 300g                   | 完存。     |
| No | 出土位置                  | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ           | 材質                        | 形状       | 色調   | 重量   | 形態、成・整形、文様等の特徴         | 残存状況・備考 |
| 18 | No.マド                 | 漆漆<br>漆器漆 | —      | —      | (60)         | 漆漆                        | —        | —  | 199g   | 漆器内部は茶色で剥離して前者する。気泡あり。 | 破片。     |

### H - 3

| No | 出土位置           | 種別、器種    | 口径     | 底径     | 高さ          | 胎土            | 焼成       | 色調                                  | 形態、成・整形、文様等の特徴  | 残存状況・備考  |
|----|----------------|----------|--------|--------|-------------|---------------|----------|-------------------------------------|---|----------|
| 1  | 剥上<br>漆器漆<br>鉢 | —        | —      | (31)   | 白・赤粒、灰<br>白 | 良好            | 内面<br>外側 | 内面：上縁部ロクナガ。脚部底面<br>外側：上縁部ロクナガ。脚部底面。 | 内縁<br>内縁部回环。  |          |
| 2  | No.4           | 漆器漆<br>鉢 | (35.2) | —      | (4.4)       | 赤色粒、灰<br>白    | 良好       | 内面<br>外側                            | 内面：上縁部ロクナガ。脚部底面ロクナガ。底部ヘラタケリ。<br>外側：上縁部ロクナガ。脚部底面ロクナガ。底部ヘラタケリ。底部有による<br>底面黒色。 | 底部残存。    |
| 3  | 剥上<br>漆器漆<br>鉢 | —        | —      | (30.0) | (47)        | 白・赤粒、石<br>灰・白 | 良好       | 内面<br>外側                            | 内面：脚部底面ヘラタケリ。脚部底ロクナガ。<br>外側：ロクナガ。下縁部ヘラタケリ。脚部ロクナガ。                           | 側面1/2残存。 |

### H - 4

| No | 出土位置                | 種別、器種     | 口径     | 底径     | 高さ          | 胎土           | 焼成          | 色調                 | 形態、成・整形、文様等の特徴  | 残存状況・備考                     |   |
|----|---------------------|-----------|--------|--------|-------------|--------------|-------------|--------------------|---|-----------------------------|---|
| 1  | No.26               | 刷毛陶<br>瓶  | —      | —      | (27)        | 白・赤粒、灰<br>白  | 厚壁<br>少薄    | 燒成砂<br>未燒成砂<br>燒成砂 | 内面：ロクナガ。企鉤頭部有削痕。底部黒色。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。   | 破片。                         |   |
| 2  | No.1                | 刷毛陶<br>瓶  | —      | —      | (3.5)       | 赤色粒、灰<br>白   | 厚壁<br>少薄    | 燒成砂<br>未燒成砂<br>燒成砂 | 内面：ロクナガ。企鉤頭部有削痕。底部黒色。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。   | 地化現れ風。底部残存。                 |   |
| 3  | 剥上<br>刷毛陶<br>瓶      | (15.6)    | —      | (5.5)  | 白・赤粒、灰<br>白 | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。上縁部回环。上縁一部ハマリによる底<br>部黒色。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。                                   | 破片。尾・足・后・号式部類。              |   |
| 4  | 剥り方<br>刷毛陶<br>瓶     | —         | (79)   | (34)   | 白・赤粒、灰<br>白 | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。施釉方法不明。施<br>釉内面：底面有日落斑。底部有施釉痕迹。施釉方法不明。底部白色。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。     | 身・背面部1/4残存。<br>底部。大足・2号式部類。 |   |
| 5  | 剥上<br>刷毛陶<br>瓶      | (32.4)    | (6.4)  | (28)   | 白・赤粒、灰<br>白 | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。施釉方法不明。<br>外側：ロクナガ。上縁一部ハマリによる底部黒色。<br>内面：ロクナガ。上縁一部ハマリによる底部黒色。施調法<br>研磨。 | 破片。身・足・1号式部類。               |   |
| 6  | No.13               | 漆器漆<br>小皿 | 87     | 48     | 20          | 白・黒・赤<br>灰・白 | 中厚<br>少薄    | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。  | 山口有<br>地化現れ風。               |   |
| 7  | No.6                | 漆器漆<br>小皿 | 7.3    | 47     | 20          | 白・黒・赤<br>灰・白 | 中厚<br>少薄    | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。  | 破片。                         |   |
| 8  | No.22               | 漆器漆<br>小皿 | 7.7    | 46     | 1.8         | 白・黒・赤<br>灰・白 | 良好          | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：ロクナガ。  | 山口有<br>地化現れ風。               |   |
| 9  | 剥上<br>漆器漆           | (18.0)    | —      | (2.6)  | 赤色粒、灰<br>白  | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。上縁部工状跡。<br>外側：ロクナガ。   | 剥片。                         |   |
| 10 | 剥上<br>漆器漆<br>小皿     | —         | (14.3) | (35)   | 白・赤粒、灰<br>白 | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。施釉内付料。端部は平底で斜めに整形されて<br>いる。   | 破片。                         |   |
| 11 | 剥り方<br>漆器漆<br>小皿    | (14.4)    | (29)   | (35)   | 白・赤粒、灰<br>白 | 厚壁<br>少薄     | 燒成砂<br>未燒成砂 | 内面<br>外側           | 内面：ロクナガ。底部斜面切欠き後無調整。施釉内付料。端部は平底で斜めに整形されて<br>いる。   | 破片。                         |   |
| No | 出土位置                | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ          | 胎土           | 焼成          | 色調                 | 形態、成・整形、文様等の特徴  | 残存状況・備考                     |   |
| 12 | No.10.15.<br>12.18. | 漆器漆<br>鉢  | (26.0) | (21.0) | 15          | 白・黒・赤<br>灰・白 | 中厚<br>少薄    | 内面<br>外側           | 内面：底面有施釉痕迹。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：底面有施釉痕迹。底部斜面切欠き後無調整。  | 2/3残存。                      |   |
| 13 | No.16               | 漆器漆<br>鉢  | 36.1   | 17.5   | 22          | 白・赤粒、灰<br>白  | 中厚<br>少薄    | 内面<br>外側           | 内面：底面有施釉痕迹。底部斜面切欠き後無調整。<br>外側：底面有施釉痕迹。底部斜面切欠き後無調整。  | 3/4残存。底部欠損。                 |   |
| No | 出土位置                | 種別、器種     | 長さ     | 幅      | 厚さ          | 材質           | 焼成          | 重量                 | 形態、成・整形、文様等の特徴  | 残存状況・備考                     |   |
| 14 | No.25               | 漆器漆<br>鉢  | 8.3    | 20     | 10          | 漆            | —           | —                  | 307g  | —                           | — |
| 15 | No.24               | 漆器漆<br>鉢  | 6.1    | 19.5   | 0.75        | 漆            | —           | —                  | 14.8g   | —                           | — |

| No | 出土位置 | 種類        | 形質   | 幅    | 厚さ   | 材質  | 焼成   | 色調 | 重量  | 形状、成・整形、文様等の特徴 | 焼成状況・備考   |
|----|------|-----------|------|------|------|-----|------|----|-----|----------------|---|
| 1  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 2  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 3  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 4  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 5  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 6  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 7  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 8  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 9  | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 10 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 11 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 12 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 13 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 14 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 15 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 16 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 6.4  | 1.2  | 0.4 | 既    | —  | 65g | —              | —   |
| 17 | 土器   | 縦縫目付<br>鉢 | 直縫目付 | 33.8 | 27.1 | 9.2 | 粗粒泥岩 | —  | —   | 11.3kg         | 上口に外付式平蓋を有する。直縫目付。丁度四寸八分頭。圓筒形。内側は素面。外側は縦縫目付で、縫合部に凹みがあり、縫合部の内側には縫合部に沿うように凹みがござります。 |

二〇

| No | 出世位置  | 種類・品種     | 口徑     | 絞径    | 高さ    | 地土              | 咲花        | 色調                 | 特徴・成・整性・文様等の特徴   | 栽培のtips・参考     |
|----|-------|-----------|--------|-------|-------|-----------------|-----------|--------------------|--|----------------|
| 1  | 裏土    | 夙川園器純     | -      | [6.2] | [1.5] | 白色系             | 碧桃        | 朱紅                 | 外周 ロココア。船形花台、錦地の施用。葉面淡緑色。三日月窓。                                     | 選育<br>生産地不明。   |
| 2  | 裏土    | 夙川園器月夜    | [14.9] | [6.4] | 27    | 白・葉面紅、<br>葉縁有   | 不直        | 外周 ピンク色、<br>内側 淡緑色 | 外周 ピンク色。船形花台。<br>内周 ロココア。  | 1-2年育<br>分化促成。 |
| 3  | No.29 | 笠置の月夜     | -      | [7.0] | [4.6] | 葉面紅斑、<br>葉縁有    | 不直        | 外周 淡緑色、<br>内側 淡緑色  | 外周 ロココア。船形花台。<br>内周 ロココア。  | 選育<br>分化促成。    |
| 4  | No.49 | 御室園<br>小鉢 | 8.85   | 5.6   | 28    | 白・葉・葉色<br>紅・葉縁有 | やや<br>内・外 | 碧桃                 | 外周 ピンク色。底部回転し枝葉濃葉。葉脈に円筒状の瘤状突起。<br>内周 ピンク・葉縁コロナ。葉脈ロココア。底部に円筒状の瘤状突起。 | 選育生<br>分化促成。   |

H-6

| No | 出土品名   | 種類          | 前縁   | 口径  | 往復   | 高さ              | 施土       | 材質       | 色調       | 形態、成・點状、文様等の特徴                                     | 階級区分・備考    |
|----|--------|-------------|------|-----|------|-----------------|----------|----------|----------|--|------------|
| 1  | No.218 | 吸口器         | 11.5 | 8.3 | 24   | 円筒形、直筒<br>チャコット | やや<br>内側 | 内側<br>外側 | 青白<br>青白 | 外周 ロカリテ、弧部の内壁付近に無理矢張り<br>内周 ロカリテ。                  | 小輪器 1-4 例。 |
| 2  | No.4   | 土器蓋<br>小切型  | 10.4 | 3.5 | 11.6 | 円筒形、直筒<br>チャコット | 良好       | 内側<br>内側 | 青白<br>青白 | 内周部は弧度を保つように、蓋の内側は内側に傾いています。<br>蓋の外側はほとんど直角的な形状です。 | 安土<br>式蓋型。 |
| No | 出土品名   | 種類          | 前縁   | 底   | 厚さ   | 石目              | 材質       | 色調       | 重量       | 形態、成・點状、文様等の特徴                                     | 階級区分・備考    |
| 3  | 便座     | 石造便座<br>腰掛け | 22   | 1.8 | 60   | 灰岩              | -        | 灰白       | 35kg     | 小輪器底座。扁平。  | 安土。        |

H-7

| No. | 出土位置 | 種別、香種   | 口径    | 底径   | 高さ   | 施土             | 焼成       | 色調        | 器形、成・整形、文様等の特徴       | 推定状況・備考          |
|-----|------|---------|-------|------|------|----------------|----------|-----------|----------------------|------------------|
| 1   | No13 | 頭器<br>环 | [147] | [70] | (40) | 白・黒泥付<br>縦溝、石英 | やや<br>内側 | 青褐色<br>内側 | 外腹 リコロチ。底部斜面切り落とし調整。 | 1.3残存。<br>推定化焼成。 |

II-8

| No | 出土位置 | 種別        | 寸法     | 性別 | 土色     | 地成                      | 形態、成・葉質、文様等の特徴         |  | 施狀状況・備考                  |
|----|------|-----------|--------|----|--------|-------------------------|------------------------|--|--------------------------|
|    |      |           |        |    |        |                         | 色                      | 形  |                          |
| 1  | No.1 | 土器部<br>井戸 | [14.2] | -  | [50]   | 白・青粘土<br>褐色<br>鐵石       | 直筒<br>内:明治初期<br>外:明治初期 | 上端一側面にテラコッタ、底部付近二側面にハナツギ。<br>底部内側にコロコロ、底部外側に斜め削り仕上げ。 | 14.2cm<br>内:直筒<br>外:直筒。  |
| 2  | No.2 | 土器部<br>井戸 | [14.7] | -  | [45]   | 白色土<br>赤色<br>鐵石<br>黄土   | 直筒<br>内:明治初期<br>外:明治初期 | 上端一側面にテラコッタ、底部上部に斜め削り。<br>底部下部にハナツギ。                 | 14.7cm<br>内:直筒<br>外:直筒。  |
| 3  | No.3 | 土器部<br>井戸 | [18.8] | -  | [15.8] | 白・青粘土<br>褐色<br>鐵石<br>白土 | 直筒<br>内:明治初期<br>外:明治初期 | 上端一側面にテラコッタ。<br>底部内側にコロコロ、底部外側に斜め削り。                 | 18.8cm<br>上端一側面半上1.4cm丸。 |

1-9

| No | 出土位置          | 種類 | 備考 | 口径   | 直径   | 高さ   | 断面                | 断土             | 地盤                | 色調                                    | 形状・成形・文様等の特徴   | 既往文獻・参考           |
|----|---------------|----|----|------|------|------|-------------------|----------------|-------------------|---------------------------------------|----------------|-------------------|
| 1  | 出土位置未記<br>横川方 | 土器 | 2脚 | 12.9 | —    | (2脚) | 白・青釉<br>縞模様       | やや<br>外側<br>内側 | 灰褐色<br>灰褐色<br>灰褐色 | 外側：白口黒帯模様、体：青白釉、縞模様。内側：白口黒帯模様、体：青白釉。  | 1.既往。<br>2.横川。 |                   |
| 2  | 出土位置未記<br>横川方 | 土器 | —  | —    | (未記) | 白色陶器 | 灰褐色<br>灰褐色<br>灰褐色 | 外側<br>内側<br>内側 | —                 | 正方形底盤の内側に複数模様を2条文を主に2回印。印は模様の内側にクロマツ。 | 1.既往。          |                   |
| No | 出土位置          | 種類 | 備考 | 長さ   | 幅    | 厚さ   | 石材                | 地盤             | 色調                | 重量                                    | 形状・成形・文様等の特徴   | 既往文獻・参考           |
| 3  | 出土位置未記<br>横川方 | 石器 | —  | 0.6  | 0.5  | 0.4  | 滑石                | —              | —                 | —                                     | —              | 定義。<br>既往からの追加遺物。 |

W -

| No. | 出土位置                | 種別 | 層位   | 口径 | 底径    | 高さ                | 施土                 | 焼成                 | 色調  | 形態、成・整形、文様等の特徴   | 階層状況・備考        |         |
|-----|---------------------|----|------|----|-------|-------------------|--------------------|--------------------|-----|------------------|----------------|---------|
| 1   | 現上<br>城壁の裏手<br>築造工事 | 陶器 | 28.0 | -  | (7.0) | 4.8               | 素面<br>外輪:白<br>内輪:白 | 外輪:ロコロコ<br>内輪:ロコロコ | 青白  | 直腹・<br>底付・<br>高足 | 1層・作業跡片        |         |
| No. | 出土位置                | 種別 | 層位   | 口径 | 底径    | 高さ                | 施土                 | 焼成                 | 色調  | 重量               | 形態、成・整形、文様等の特徴 | 階層状況・備考 |
| 2   | 現上<br>築造工事          | 陶器 | 18   | 17 | 0.9   | 高級金物<br>底付・<br>高足 | -                  | 灰白色                | 37g | 全白磁器製品、底付。       | 安彦。            |         |

W = 2

| No | 出土地点  | 種別 | 施設  | 口径   | 径深  | 高さ  | 出土物           | 風成 | 色調                           | 形似・成・整形、文様等の特徴                | 現状状況・備考            |
|----|-------|----|-----|------|-----|-----|---------------|----|------------------------------|-------------------------------|--------------------|
| 1  | 70-30 | 縦溝 | 小便器 | (17) | 2.1 | 0.3 | 白色地刷毛、無地刷毛少ない | 直型 | 外側: 銅鋳造部<br>内側: ロクロテラ、全面刷毛仕様 | 内側: 銅鋳造部、全面刷毛仕様、無地刷毛。         | 後壁片<br>覆瓦片<br>破質瓦。 |
| —  | —     | 横溝 | —   | —    | —   | —   | —             | 直型 | 全面刷毛                         | 馬鹿 ロクロテラ、堅打型、薄部刷毛仕様。施釉方法不明。調査 | 断面土塗地              |

| No. | 出土位置 | 種類  | 形質  | 幅     | 厚さ    | 材質  | 焼成  | 色調 | 重量   | 形態、成・整形、文様等の特徴 | 現状状況・備考          |     |
|-----|------|-----|-----|-------|-------|-----|-----|----|------|----------------|------------------|-----|
| 10  | 以上   | 板瓦  | 板瓦  | (6.2) | (1.1) | 陶土  | 直   | -  | 145g |                | 通常大量。            |     |
| No. | 出土位置 | 種類  | 形質  | 幅     | 厚さ    | 材質  | 焼成  | 色調 | 重量   | 形態、成・整形、文様等の特徴 | 現状状況・備考          |     |
| 11  | 以上   | 瓦葺瓦 | 瓦葺瓦 | 5.5   | 5.1   | 2.3 | 陶土質 | -  | -    | 638g           | 全面摩滅調。欠損部・両側に凹む。 | 瓦葺。 |

D - 1

D=3

| No | 出土位置 | 種類・品種     | 口径 | 底径 | 高さ   | 触土             | 焼成 | 色調         | 形態、成・整形、文様等の特徴                             | 残存状況・備考 |
|----|------|-----------|----|----|------|----------------|----|------------|--|---------|
| 1  | 覆土   | 切妻口<br>筒形 | -  | -  | 19.0 | 内・黒褐色、<br>チャコリ | 無焼 | 内・外<br>灰褐色 | 外側：円筒部下手にコロナジ。大底部上手へラケツリ。端底崩れ。<br>内側：コロナジ。 | 大片部残存。  |

P-1

| No. | 出土位置 | 種類  | 性別  | 年齢   | 高さ | 幅  | 地質           | 施土       | 焼成       | 色調        | 断面、形・整型、文様等の特徴        | 残存状況・備考 |
|-----|------|-----|-----|------|----|----|--------------|----------|----------|-----------|-----------------------|---------|
| 1   | No.1 | 筒瓦器 | (男) | (9歳) | 62 | 24 | 白・黒褐色、<br>灰黄 | 小切<br>内削 | 外削<br>内削 | 青褐色<br>青白 | 外曲<br>波打回転あわせ切り直し複合型。 | 2/3残存。  |

遺構外

| No | 土壌の性状      | 樹種          | 口徑   | 直通  | 高さ                  | 土壌                | 直通           | 側面     | 直通、側面、色彩等の特徴                                  | 残存状況、備考           |                 |
|----|------------|-------------|------|-----|---------------------|-------------------|--------------|--------|---|-------------------|-----------------|
| 1  | 透水性<br>透達性 | 樹木上部<br>透達  | —    | (7) | 外：白樺乾燥、<br>内：黄葉石灰   | 良好                | 外：黄葉石灰       | 良好     | 11.端部に細い根の突きを付す。10.端部は葉緑が薄い後退色。葉緑は根の先端部で最も濃い。 | 残存。<br>透達式。       |                 |
| 2  | 透水性<br>透達性 | 樹木上部<br>透達  | —    | (7) | 外：チャート、<br>内：白樺     | 良好                | 内：浅褐色の<br>土壌 | 良好     | 外：側面削除、白端部は根の先端部で薄く、裏面やないところへ延びる。             | 残存。               |                 |
| No | 土壌位置       | 樹種          | 長さ   | 幅   | 厚さ                  | 土壌                | 直通           | 側面     | 直通、側面、色彩等の特徴                                  | 残存状況、備考           |                 |
| 3  | 透水性<br>透達性 | 白樺乾燥か<br>透達 | (7)  | (5) | (2)                 | 外：白色化了、<br>内：黄葉石灰 | 良好           | 外：黄葉石灰 | 良好  | スピナツ。             | 残存。<br>人物活動の歴史。 |
| No | 土壌位置       | 樹種          | 口徑   | 直通  | 高さ                  | 土壌                | 直通           | 側面     | 直通、側面、色彩等の特徴                                  | 残存状況、備考           |                 |
| 4  | 調査区段       | 樹木上部<br>透達  | —    | (3) | (1) 外：白樺、<br>内：黄葉石灰 | 良好                | 外：黄葉石灰       | 良好     | 外：側面削除か切り取り、端部ハサツキ、削り落し済み。                    | 既削除。              |                 |
| 5  | 調査区段       | 内外上部<br>透達  | —    | (8) | (3) 外：白、<br>内：茶     | 良好                | 外：黄葉石灰       | 良好     | 外：コロコロ、側面削除か切り取り済み。                           | 既削除了干・荒れ。         |                 |
| 6  | 混合層        | 樹木透達材付      | (16) | 6   | 5.3                 | 外：白樺乾燥、<br>内：石灰   | 不良           | 外：黄葉石灰 | 外：コロコロ、削除済み。                                  | 3.4.生れ。<br>酸化物生成。 |                 |

## VI 発掘調査の成果と課題

今回の発掘調査により、本遺跡には奈良～平安時代の住居跡を中心とする構造群が、非常に高い密度で分布することがわかった。また、出土遺物にも特筆できる特徴がみられる。そこで本節では、今回の調査で出土した特徴的な遺物について、若干の検討を加えつつ紹介してみたい。

**緑釉陶器** 緑釉陶器は5点出土した。出土率は面積比で1点/26m<sup>2</sup>となり、国府域で高い出土率を示す蒼海(8・13)の1点/85m<sup>2</sup>を上回り、県内豊一の出土例である清里・陣場遺跡の1点/25m<sup>2</sup>にせまる。本遺跡の東に隣接する總社甲種荷塚大道西・大道西II遺跡でも、細片のため詳細は不明だが多数出土しており、牛池川左岸の国府域北東外縁にあたる一帯は緑釉陶器の出土率が高い。そこで以下には周辺出土例を確認し、類型化を試考した。

類型Aは完形品の特定遺構内への一括遭棄で、著名な山王庵寺南東縁の一括資料や清里・長久保遺跡の土坑墓出土例がある。類型Bは調査区単位の多数出土事例で、遺構の覆土中から破片が多数出土する。この類型は、周囲で大量消費された縄軸陶器の廃棄・流入と推定できる。調査区単位の遺物組成で細分でき、蒼海(41)のように磁器類などさらには希少な遺物が出土する例【B 1】、元経社明神遺跡Ⅲのように希少な磁器類に加えて祭祀具が出土する例【B 2】、清里・陣場遺跡のように灰軸陶器は多数伴うが磁器類は出土しない例【B 3】がある。類型Cは調査区単位で1・2片の縄軸陶器が出土する例で、最も一般的な出土例といえる。

多数出土例の類型Bをみると、B1は国府域北西部の一帯に多い。ここは推定国庁と国分僧寺・尼寺に囲ま

れた地勢で、三彩陶器や円面鏡、金の付着した灰釉陶器など、希少で多彩な遺物が出土し、背景に国府城の活発な経済活動を想定できる。B 2 は周辺では元総社明神遺跡跡が唯一の例で、牛池河畔での高級壺器や木製祭具を用いた祭祀には、国家規模の律令的祭祀が想定されている。B 3 の例である清里・陣場遺跡は「有力者の居宅」と類推されている（中沢 1981）。また、国府城西端の蒼海（8・13）もこの類型にあたる。この一帯は蒼海（13・20・40）などで確認された南北方向の道路状造構と染谷川の交通結節点にあたる。

本遺跡はB3に類型化できる。地勢は国府城西端に似ており、牛池川左岸における交通結節点の性格を想定できるが、その場合は物流関係の指向として、山王庵寺を中心とした伝統的な政治的中枢地域との関係に留意する必要がある。また、清里・陣場遺跡のような想定をした場合も、国府城北東外縁という地勢に留意する必要はある。ちなみに、本遺跡で縄文陶器が使われた9~10世紀は、調査区内では住居跡の空白期となることは興味深い(Fig. 6)。しかし今回の調査区は議論には狭く、周辺調査例の増加がなお必要と考える。

「平安時代の縁釉陶器は、仏寺・祭祀遺跡のみならず、都城跡、地方官衙はもとより、一般的な集落址からも少なからず出土し、ほぼ全国的な出土分布を示す。」と言われ、「平安時代の食器の様式転換は、つまるところ、祭器から日常仕器への転換であった」とされる（巽 1985P55L21～23・L25～27）。上野国府城で、類型 A や B 2 に加え、B 1 や本遺跡を含めた B 3 の例があることは、このような文脈の中で必然とも言えるのだろう。

「方光」銘押印瓦 H-4 のカマドは構築材として、「方光」銘押印丸瓦を転用していた。丸瓦は据え穴に広端部を下、つまり、瓦葺きと押印の方向からすると正位に設置されるが、これが構築材としての安定性を求めた結果なのか、押印を意識したものは分からぬ。「方光」銘押印瓦には、山王庵寺の所用瓦であること・陽刻の木印を用いること・2種の木印があり細字から太字へ木印を削り直していること・丸瓦の両面と平瓦の凸面に例があることなどが指摘される（相川 1934、住谷 1935、前橋文化財研究会 1980、前橋市教育委員会 2010・2012a）。本例の「方光」は、完全には一致しないが細字の一群に似る（屏絵参照）。また、6次調査図 17-2・5・19 A 135-12 T（山王庵寺金堂）、20 A 135-24 T 整理番号 24-17（山王庵寺塔跡西）のように、丸瓦凸面の側面に押印される資料が知られていたが、今回、残存率の高い丸瓦の四隅に押印が確認できたことは、その押印方法の全体像を類推する一助となるだろう。本例はやや柔らかい灰黄色の焼成だが、凸面は長縄叩きで縱位に叩き締めた後、横位のナデでやや丁寧に整形し、凹面に模骨板はない。すなわち、既出資料と同様、山王庵寺6次調査分類のⅢ類、栗原分類のⅡ B 3類（前橋市教育委員会 2012b）に相当する。Ⅲ類丸瓦には「天長八」（831年）の箋書瓦があり、9世紀第2四半世紀以降に使われた瓦と論証されている。一方、これがカマドに転用されたH-4の時期は、出土した土器から11世紀前半と推定できる。ちなみに、栗原分類では、この時期の丸瓦は「方光」銘押印瓦と「天長八」（831年）の箋書瓦と並んで、上野国府城の縁軸陶器出土状況

Tab. 4 周辺の綠釉陶器出土遺跡



Fig.20 上野国府域の縄文陶器出土状況 (S=1/15,000)

原和彦氏は「上野国交替実録帳」の検討から、山王庵寺の廃絶を長和3年（1015年）以前とみる（前橋市教育委員会2012b）。であるとすれば、H-4に「方光」銘押印瓦が使われた頃、山王庵寺の伽藍はほぼ廃絶していたと類推できるだろう。

魔寺となって間もない放光寺の跡地に、同時代を生きた彼岸の人々はどのような心象をもったのか。そのような土地から建築材として拾われた「方光」は果たして、単純な「無機物」だったのであろうか。

**竈形土製品** H-2古段階の覆土下層からは、特異な形の土製品が出土した。壺の口縁部のように外反するが非常に極端で、胎土は粗く、器壁はとても厚くて重い。上端から内面には煤の付着と摩滅が顕著で、形と使用痕から竈形土製品と類推した。竈形土製品あるいは置き竈・竈形土器は近年、神谷佳明氏が全国的な集成と出土状況をもとにした用途論を展開されており（神谷2016）、これに掲げながら本例を紹介したい。

本例は、有頭形態の掛口部片と推測できる（Fig21右）。有頭形態は山陰から北陸地方に集中し、上野では太田市大道東遺跡の推定東山道側溝に例がある程度で地域的な偏りがある。竈形土製品は一般に祭祀に伴う器物といわれるが、本例のように住居跡から出土する例も全国的にある。上野・上総など東国的一部では、住居跡の造り付けカマド内から出土する例もあり、竈神信仰との関係が指摘される。とはいえ、出土例はとても少なく、活発な「交通」が想定できる国府城周辺でもその傾向はあまり変わらず（Fig21左）、一般化した習俗ではなかつたようだ。竈形土製品には6~11世紀の資料が知られる。上野では10世紀後半に推定される高崎市兩窓遺跡25号住居跡カマド内の例が上限であり、本例が遺跡の存続期間内に使われたものであることだけは類推できる。

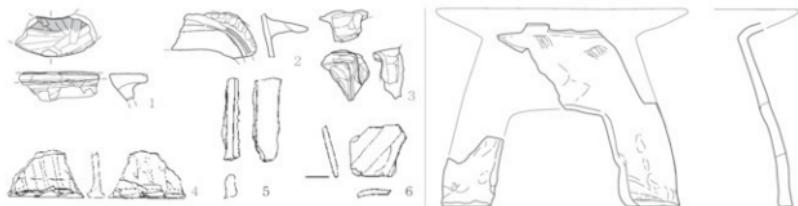
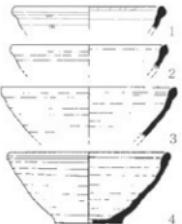


Fig21 周辺遺跡出土の竈形土製品と有頭形態の竈形土製品 (S=1/10 一部再トレース)

**特徴的な土器** 本遺跡では他にも、三足土器と類推できる細片や鉄鉢形土器、甚石と類推できる小石、口縁部が玉環状をした須恵器鉢などの破片が出土した。特に口縁部が玉環状の須恵器鉢は、在地産の須恵器に比べ胎土は緻密で焼成も良く、特徴的な器形をしている。

玉縁状の肥厚口縁を特徴とする鉢は、京都府亀岡市篠塚跡群の製品が有名で、俗に「篠鉢」と呼ばれるほどの個性をもつ。H-4の出土資料は、この「篠鉢」に類似する。口径は小型鉢に一致し、口縁形態は阪大分類の弱突タイプに相当する（大阪大学考古学研究室篠塚調査団2012）。さらには肥厚口縁成形時の粘土圧延と曲げ技法を示す断面の粘土織も同様に観察できる（巻頭図版2参照）。比較資料とした大谷3号窯の操業時期は9世紀第4四半世紀に比定され、平安京右京二条二坊三町SX-1には「天曆七」（953年）の墨書き土器が共伴することから、本遺跡では綠釉陶器が使われた頃に搬入された須恵器と推測できる。

「篠鉢」は、9世紀後半頃の都城で数多く消費される。その生産と流通は受領層に代表される国衙勢力と国家間の関係によって維持されたという（高松2012）。この須恵器は、「都ぶり」を求めた当地の人々の思惑と、国衙勢力の台頭めぐるしい王朝国家期の経済構造に乗って、綠釉陶器とともに本遺跡へ辿りついたのかもしれない。



1-本遺跡 H-4-9 2-3-篠塚窯大谷3号窯 4-平安京右京二条二坊三町 SX-1

Fig22 H-4-9と篠塚窯産小型鉢の比較 (S=1/8)



調査区全景（北から）



調査区北半部全景（北西から）



調査区南半部全景（北西から）



H-1 全景（南東から）



H-2（新）全景（東から）



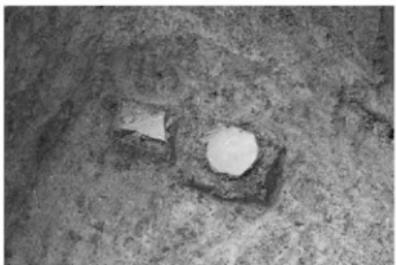
H-2 (新) カマド全景 (北東から)



H-2 (新) 掘り方・H-2 (古) 全景 (西から)



H-2 (古) カマド全景 (西から)



H-2-1 緑釉陶器碗出土状況 (北から)



H-3 全景 (北東から)



H-4 全景 (西から)



H-4 カマド遺物出土状況 (西から)



H-4 カマド天井石崩落状況 (南西から)



H-4-6 須恵器小皿出土状況（南西から）



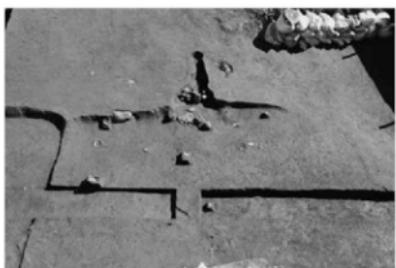
H-4 カマド全景（西から）



H-4-12・13 カマド構築材出土状況（西から）



H-4-17 台石出土状況（南から）



H-5 全景（西から）



H-5 カマド全景（西から）



H-5-4 須恵器小皿出土状況（北西から）



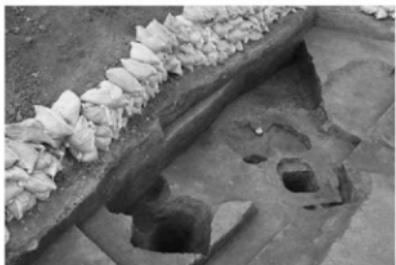
H-6 全景（北西から）



H-6-2 土師器壺出土状況（南から）



H-7 カマド全景（南から）



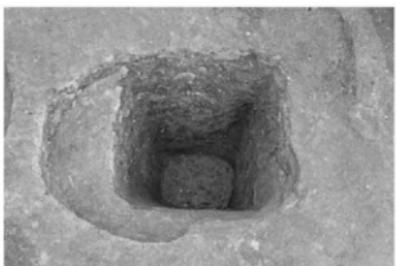
H-8 全景（南東から）



H-8 カマド全景（南西から）



H-8 カマドSPB北側抽部土層断面（南西から）



H-8 野藏穴全景（南西から）



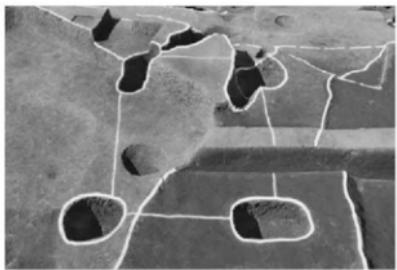
H-8 挖り方全景（北東から）



H-9 カマド全景（北西から）



H-10全景（北西から）



B-1 全景（東から）



W-1 全景（東から）



W-2 全景（北から）



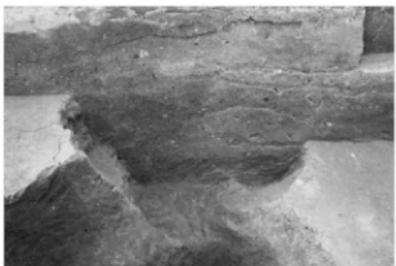
I-1 全景（東から）



D-1-3 灰釉陶器皿出土状況（北から）



D-2 全景（北から）



D-4 全景（東から）



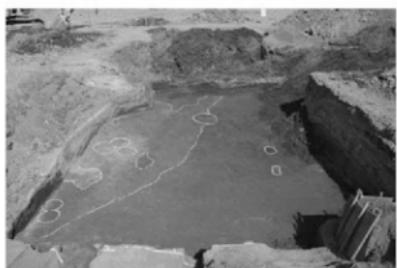
D-5 SPA土層断面（北西から）



D-5 全景（北西から）



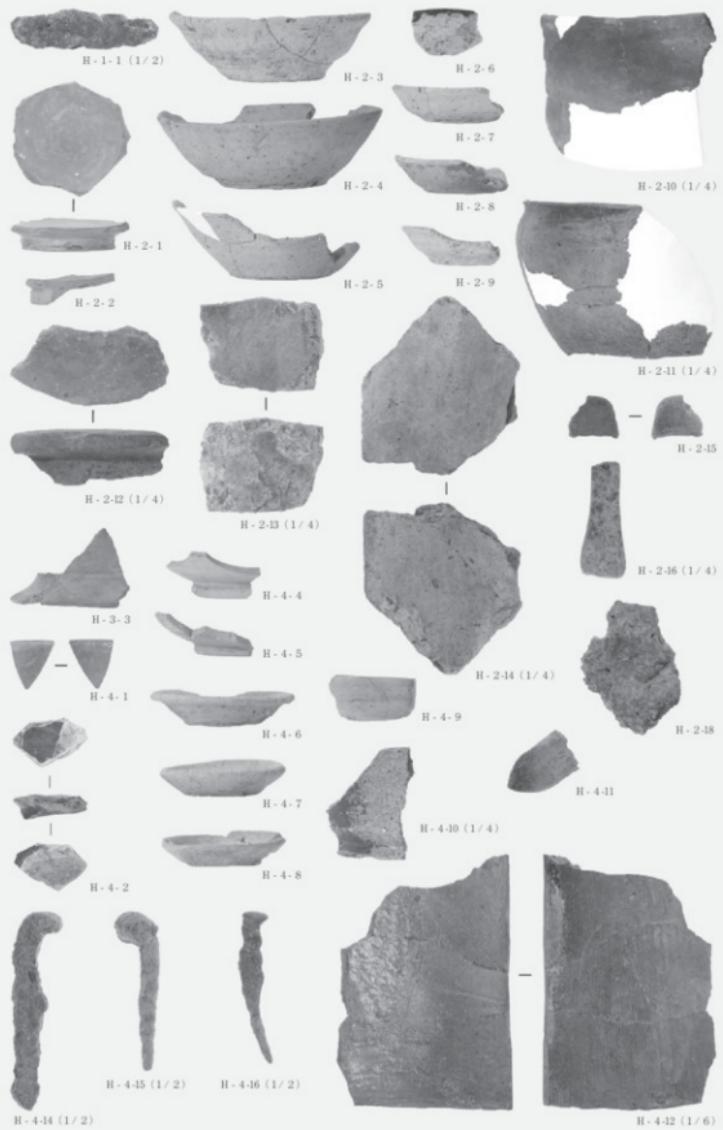
P-1 全景（西から）

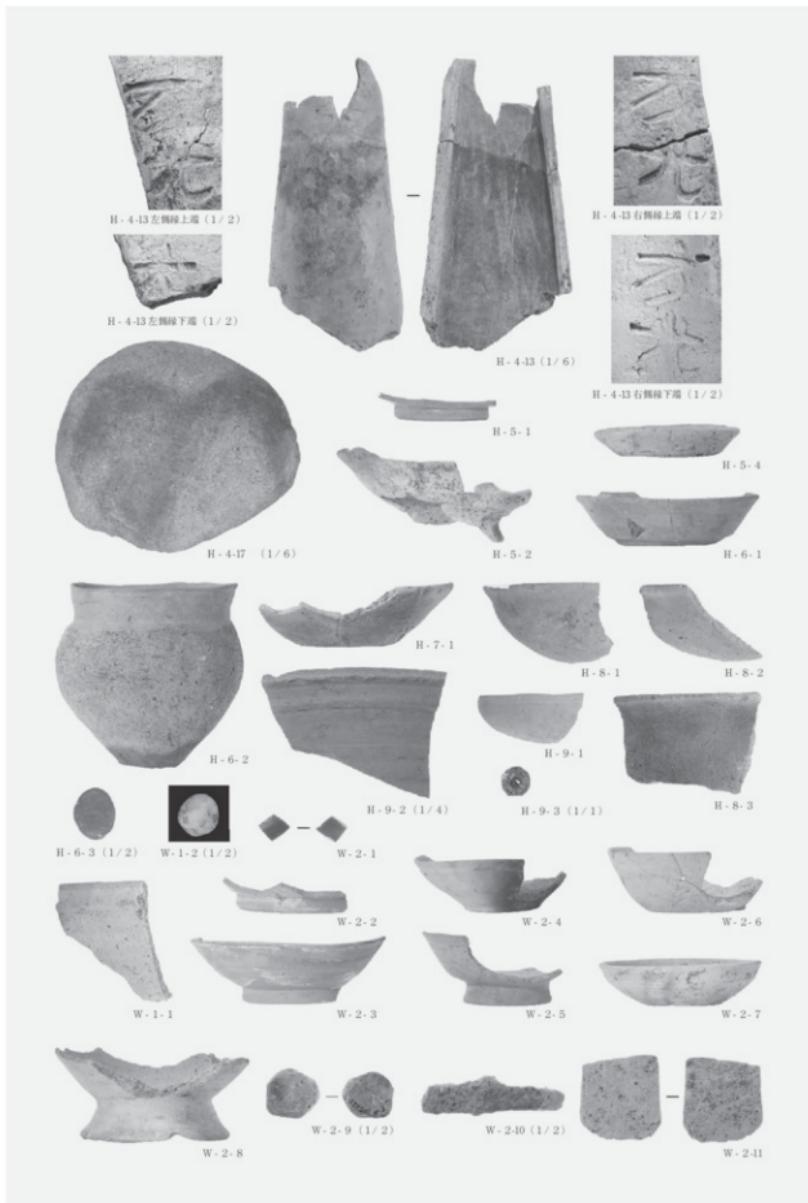


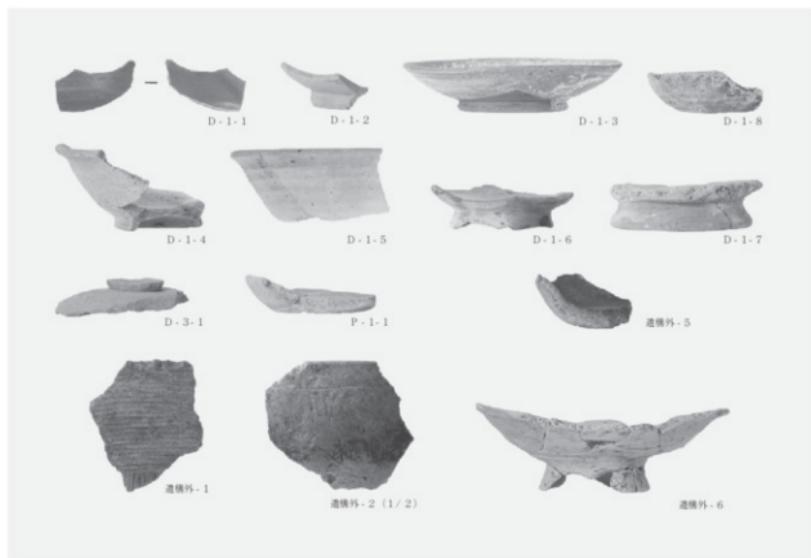
P-2 取扱造構確認状況（南から）



調査風景（北東から）







遺跡説明会の様子（北から）

## 報告書抄録

|         |                                |
|---------|--------------------------------|
| カタカナ    | モトソウジャチュウガッコウセキ                |
| 書名      | 元総社中学校遺跡                       |
| 副書名     | 元総社中学校体育館改築建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 卷次      | —                              |
| シリーズ名   | —                              |
| シリーズ番号  | —                              |
| 編著者名    | 小峰 篤・中村信彦                      |
| 編集機関    | 技研コンサル株式会社                     |
| 編集機関所在地 | 〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3     |
| 発行機関    | 前橋市教育委員会                       |
| 発行機関所在地 | 〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4      |
| 発行年月日   | 2016年9月30日                     |

| フリガナ     | フリガナ     | コード                |          | 位置     |  | 調査期間                                     | 調査面積      | 調査原因                  |
|----------|----------|--------------------|----------|--------|--|--|-----------|-----------------------|
|          |          | 所在地                | 市町村      | 遺跡番号   | 北緯   |  |           |                       |
| 元総社中学校遺跡 | 元総社中学校遺跡 | 前橋市総社町総社<br>3148はか |          | 102021 | 27A207                                       | 36°23'32"                                | 139°2'20" | 20160208<br>/20160229 |
| 所収遺跡名    |          | 種別                 |          | 主な時代   |  | 主な遺構                                     |           | 主な遺物                  |
| 元総社中学校遺跡 | 集落       | 古墳時代               | 住居跡      | 10軒    | 縄文土器<br>(前期・後期)<br>縄袖陶器<br>(輪花碗・碗・段皿・<br>小壺) | 縄文時代晚期の土器片。                              |           |                       |
|          |          | 奈良時代               | 掘立柱建物跡1棟 |        | 灰釉陶器<br>(碗・皿・壺)                              | 古墳時代中期末～後期初頭<br>の住居跡群。                   |           |                       |
|          |          | 平安時代               | 溝跡       | 2条     | 須恵器<br>(蓋・坏・壇・小皿・<br>小壺)                     | 奈良～平安時代前期の住居<br>跡群と柱穴。                   |           |                       |
|          |          | 中～近世               | 井戸       | 5基     | 灯明具・鉢・鉄鉢形<br>土器・壺・壺)                         | 平安時代中期の縄柱式掘立<br>柱建物跡と溝。                  |           |                       |
|          |          |                    | 土坑       | 5基     | 土師器<br>(坏・壺・三足土器)                            | 縄袖・灰釉陶器・窯窓須恵器、<br>電形土製品。                 |           |                       |
|          |          |                    | ビット      | 1基     | 鉄製品(刀子・釘)<br>土製品(電形)<br>石製品<br>(碁石・砾石・白玉)    | 平安時代後期の住居跡群。<br>カマド構造材に転用された<br>「方光」銘丸瓦。 |           |                       |

### 元総社中学校遺跡

元総社中学校体育館改築建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年9月23日 印刷  
2016年9月30日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4  
TEL 027-289-6511

編集  
印刷

技研コンサル株式会社  
朝日印刷工業株式会社